序　和文構造の基本原理

この「序」では、比較的簡単な**和文**を素材にして、**文構造**の**基本的な見方や考え方**を学びます。まずは身近な日本語を利用することで、**体系的かつ実感のこもった理解**を目指そうというわけです。

この章の目次

序　和文構造の基本原理
- 0.1　言語と規範
- 0.2　文の基本構造（事象と判断との区別）
  - 0.2.1　基本的な３つの文構造
  - 0.2.2　判断という認識
- 0.3　修飾による複雑化（係り受け①）
  - 0.3.1　述語に対する修飾
  - 0.3.2　判断に対する修飾（観念的な自己分裂）
- 0.4　助動詞の働き（代表的な判断）
  - 0.4.1　文構造の表し方を再検討する
  - 0.4.2　否定の場合
  - 0.4.3　過去の場合
  - 0.4.4　否定と過去を組み合わせる
  - 0.4.5　否定の過去の推量なら？
  - 0.4.6　過去と未来の比較
- 0.5　助詞の働き（品詞変更①と係り受け②）
  - 0.5.1　修飾語を作る
  - 0.5.2　主語や目的語を作る
  - 0.5.3　「は」と「が」
  - 0.5.4　「象は鼻が長い」
  - 0.5.5　時枝の「句」と学校文法の「文節」
  - 0.5.6　内部に文を含む場合
- 0.6　接尾語の働き（品詞変更②）
  - 0.6.1　受け身の「れる」「られる」
  - 0.6.2　使役の「せる」「させる」
  - 0.6.3　受け身と使役を組み合わせる
  - 0.6.4　「水が飲みたい」（品詞を変える接尾語）
  - 0.6.5　完了の「た」「ている」
  - 0.6.6　進行の「ている」
- 0.7　意味的関係と語順との両立
  - 0.7.1　意味的関係を維持したまま語順を変える場合
  - 0.7.2　語順は同じなのに意味的関係が異なる場合
  - 0.7.3　表示方法のバリエーション
- 0.8　まとめ
  - 0.8.1　和文の基本構造
  - 0.8.2　日本語の品詞
  - 0.8.3　カタマリの種類
  - 0.8.4　品詞類（４大品詞の語・語群・相当語句）
  - 0.8.5　日本語特有の構造あれこれ
- 0.9　「序」のおわりに

0.1　言語と規範

対象－認識－表現

言語 とは、頭の中にある 認識 を外に表したもの（表現）の一種です。認識 というのは、その人が見たり聞いたり感じたりしたもの（対象→認識）や他人から伝えられたもの（表現→認識）をベースとしていて、さらにその人なりに考えたこと（認識→認識）も含まれています。そして、認識 は書かれたり話されたりすることによって、**他人が目や耳などで感じ取れるもの**となります。(手話のように体の動きを利用するものもあります。)

一方、**聞き手**や**読み手**（**受信者**）の側は、持ち合わせているさまざまな知識・経験・理屈あるいは感受性といったものを動員して（必要なら調べ物などもしたうえで）その**意味**を理解しようとします。もちろん**話し手**や**書き手**（**発信者**）の側も、受信者に正しく理解してもらえるように表現方法を工夫することになります。

とは言うものの、これらのことは 言語 以外の表現（たとえば**音楽**や**絵画**や**彫刻**や**踊り**、さらには**身振り手振り**など）にも共通していることでしょう。それでは 言語 **に特有な**（と同時に 言語 **においては普遍的に成り立つ**）**こと**はいったい何でしょうか？　それは、「こういう**種類**の 認識 はこういう**種類**の**形式**で**表現**する」という**社会的なルールが存在している**ことです。

言語における規範と秩序

言語に関する社会的なルールは「**言語規範**（きはん）」などと呼ばれます。その中身としては、文字、音声、語句（意味・形式・並べ方）、文章などに関するものがあります。

野球などの試合がルールに従って実施されるとそこに何らかの秩序が生じますが、言語の場合も同じです。その秩序を分析して「この背後にはどんなルールがあるのだろうか？」と考えを進めていくと、文の組み立て方や語句の意味・使い分け方などに関する知識が蓄積・整理され、徐々に体系化されていきます。そしてその一部分が「**文法**」と呼ばれます。

目的意識的な学習の必要性

さて、一つひとつの 文 は発信者が表したい 認識 に対して**言語規範を適用しながら組み立てる**ものですから、他人が発した 文 の内容を理解する（同じような 認識 を持つ）には、受信者の側も**同じルール**を知っておく必要があります。

母語（ぼご）（皆さんのほとんどにとっては日本語でしょう）の場合、**言語能力はアタマやココロの働きと表裏一体のものとして成長してきた**はずです。しかし、**外国語**を学び始めるときにはアタマやココロの働きはかなりのところまで育ってしまっているわけですから、外国語を母語と同じ要領で学ぶことは困難です。そこでそのギャップを埋めるために行われるのが、**目的意識的な学習**です。もちろん、かけられる時間の短さをカバーすることにも役立ちます。

学習テーマのうち語句をつなぎ合わせて文を組み立てること（**統語**）に関しては、短く簡単なものから長く複雑なものへと**段階を追って進めていく**ことが大切です。本書もそのことを意識した構成になっていますので、**目次**や**小見出し**を参照しながら読み進めてください。

0.2　文の基本構造（事象と判断との区別）

0.2.1　基本的な３つの文構造

例文
①(1) 彼は 学生だ。
①(2) 彼は 若い。
①(3) 彼は 働く。

※他に「彼は元気だ。」のようなものもありますが、今は省略します。

まずは上記のようなごく簡単な文から始めましょう。それぞれを適当と思われるところで区切って縦に並べると、

①(1) 名詞文	①(2) 形容詞文	①(3) 動詞文
彼は	彼は	彼は
学生だ／学生です。	若い／若いです。	働く／働きます。

のように図式化できます。

※例文欄には書きませんでしたが、図では参考まで**敬体文**（です・ます）での言い方も添えておきました（ ⇔**常体文**）。

※「若いです」のような言い方は標準的ではないという説もありますが、本書ではこの言い方も認めることにします。

文の最初にある

彼は

の部分は「**主語**」という名称でよく知られていますし、後半の

学生だ／学生です　　若い／若いです　　働く／働きます

は「**述語**」という名称でよく知られています。

述語に含まれている「学生」は**名詞**、「若い」は**形容詞**、「働く」は**動詞**ですから、それぞれの文を「**名詞文**」「**形容詞文**」「**動詞文**」と呼ぶことにしましょう※。上の図では、それぞれに違うデザイン（色・形）の枠を使っています。

※「名詞述語文」「形容詞述語文」「動詞述語文」と呼ばれることもあります。

※少し堅苦しい話をすると、**名詞**というの**属**を表すのに使われます。また、各**実体**にはさまざま**属**がありますが、基本的には、そのう**静的な属性**を表すのが**形容詞**、**動的な属性**を表すのが**動詞**、と言うことができます。

0.2.2　判断という認識

例文
②(1) 彼は 学生だろう。
②(2) 彼は 若いだろう。
②(3) 彼は 働くだろう。

判断の存在

さて、前項の文はいずれも肯定(こうてい)的に言い切っていますが、言い切れないときは

②(1) 名詞文　　**②(2) 形容詞文**　　**②(3) 動詞文**

彼は 学生だろう／でしょう。　　彼は 若いだろう／でしょう。　　彼は 働くだろう／でしょう。

のように図式化できそうです。しかし、たとえば名詞文について

①(1) 名詞文　と　**②(1) 名詞文**

彼は 学生だ／です。　　彼は 学生だろう／でしょう。

の２つを比較してみると、これらは

・まず、[彼＝学生]※という**事実関係**を思い浮かべる
・次に、「だ／です」や「だろう／でしょう」という**判断**をする

※ここでは直感的なわかりやすさのために「＝」を使用したが、このケースでは左右を入れ換えた［学生＝彼］は成り立たない。この文は、**同じ人物**を「彼」および「学生」という**複数の側面**から捉えたものであるが、**その関係自体**は表現されていない。形容詞文や動詞文についても、「若い」や「働く」は「彼」という人物の**属性**（性質や行為）を表しているものであって別の人物に関するものではないという理由で「＝」を用いることがある。いずれにしてもこの「＝」は数学記号ではない点に注意。

※なお、注文時などに使われる「私**は**ウナギ」のような言い方（「ウナギ文」と呼ばれる）の場合には、「私」および「ウナギ」という**別々の存在の間にある何らかの対応関係**がイメージされている。しかし、日本語ではこの関係も表現されないせいで「＝」の場合との区別がしづらい。

という**２重構造**になっていると考えられます。そこでその考えに基づいて図を書き直すと

①(1) 名詞文　と　**②(1) 名詞文**

彼は 学生 だ／です。　　彼は 学生 だろう／でしょう。

のように表すことができます。これらの図では、文末にある「だ／です」や「だろう／でしょう」といった**判断**を 特徴的なデザイン で表すとともに、**判断の対象**である「彼は 学生」を右に１文字分ずらして（**字下げ**して）います。

表現されていない判断もある

また、①(2)(3)では「だ」が表現されていませんが、**発信者の頭の中には同様の認識（肯定判断）がある**のではないかと考えられます。そうだとすると、結局、これらの文は



のように比較的一貫した形式で表現できることになります。

本書ではこのように**判断**とその**対象**（本書では「**事象**」と呼びます）とを明確に区別しますので、**述語**（**事象**を表す）には 学生、若い、働く／働き といった部分だけを含め、その後にある 判断を表す部分 は含めません。これは学校文法とは違うところですので注意してください。

①(2)(3)で使われている「∅」は、**認識はあるはずなのに言語としては表現されていない**ことを示しています。本書ではこれを「**ゼロ記号**」と呼びます※。表現されていない認識をも記号として視覚化すると、ルールの一貫性が見えやすくなります。

※発案者である国語学者**靹**は灰色の正方形 ■ で表し、零記号」と呼んでいました。その後、時枝理論の批判的継承者のひとりであった三浦つとむは「零記号」と書いて「ぜろきごう」と読んでいましたので、本書では「ゼロ記号」という表記を採用しました。なお、記号「∅」は、数学で空集合」を意味するものを借用しています。

なお、**ゼロ記号**という考え方に対しては、「形容詞述語や動詞述語はそれ自体が肯定判断をも表しているのであって、ゼロ記号のようなものは不要である」と考える人もいます。しかし、**推量を表すために「う」を付けるときには「だろ」も言わなくてはならない**のですから、**形容詞述語や動詞述語そのものは肯定判断を表さない**と考えた方が合理的でしょう。そこで本書では、「**肯定判断の認識はいつも形容詞述語や動詞述語の直後にある**が、①(2)(3)のようなケースでは（何らかの理由で）表示されないルールになっている※」と考え、該当箇所に「∅」を使用することにしています。

※長野・山梨・静岡方言などには 赤い だ / 行く だ のような言い方があります。現代の共通語では、赤い や 行く の後に だ を付けたいときは の/ん を挟むことになっていて、の/ん を挟まないときは だ も言いません。ところが、そのようなルールを持っていない（古いルールを維持した）方言も存在しているわけです。

0.3　修飾による複雑化（係り受け①）

0.3.1　述語に対する修飾

例文
③(1) 彼は　東大の学生 だろう。
③(2) 彼は　とても若い だろう。
③(3) 彼は しっかり働く だろう。

修飾（しゅうしょく）ということ

述語である「学生」「若い」「働く」の前に「東大の」「とても」「しっかり」が付け加えられたとき、「東大の学生」「とても若い」「しっかり働く」というカタマリの内部はどうなっているのでしょうか？

(1)では、「東大の」は「学生」に対して説明を加えています。つまり、「東大の」は 学生 という**名詞**を**修飾**しているわけです。名詞 **を修飾するもの**の代表は 大きい 白い 賢い などの**形容詞**ですから、「東大の」は 形容詞的修飾語 として働いていると言えます。

※東大の学生というのは一人の（「彼」と同一の）人間なのですが、そのような人のことを直接表せる単語はありません。そこでヨリ広い意味を持つ「学生」という語を用いるとともに、それでは表しきれない性質（の一部）を「東大の」で表して、それらを組み合わせています。このことは以下の(2)(3)についても成り立ちます。

(2)では、「とても」は 若い という**形容詞**を**修飾**しています。形容詞 **を修飾するもの**の代表は**副詞**（ふくし）と呼ばれ、「とても」もそういう副詞の一つなのですが、ここではその働きを重視して 副詞的修飾語 というくくり方をしましょう。

(3)では、「しっかり」は 働く という**動詞**を**修飾**しています。動詞 **を修飾するもの**の代表も**副詞**と呼ばれ、「しっかり」もそういう副詞の一つなのですが、上と同様に働きを重視して 副詞的修飾語 というくくり方をしましょう。

以上をまとめると、修飾については

- 名詞 を修飾するのは　形容詞的修飾語
- 形容詞 を修飾するのは　副詞的修飾語
- 動詞 を修飾するのも　副詞的修飾語

という関係があることになります。まだ登場してはいませんが、

- 副詞 を修飾するのも　副詞的修飾語

という関係もあります。

これらは文や語句の中で**特定の働きをする部分**だと言えます。一方、修飾される側の語は「**被**（ひ）**修飾語**」と呼ばれます。

※修飾しても対象の範囲が狭まらないことがあります。

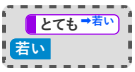
文中での扱い方

前項までの文では**述語**は単独の**語**でしたが、今回は修飾語が付加されることで**カタマリ**になって一つの**事象**を示しています。そこでこの部分を「**事象部**」と呼ぶことにしましょう。手始めに各文の事象部だけを図式化すると

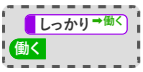
③(1) 名詞文の事象部



③(2) 形容詞文の事象部



③(3) 動詞文の事象部



と表すことができます。新登場の枠 は**事象部**としてのまとまりを表すために導入しました。

ここで、**述語**そのものである **学生**、**若い**、**働く** は**事象**における中心的な存在であり、これらは**修飾語**である **東大の**、**とても**、**しっかり** によってサポートされています。これも一種の**主従関係**ですから、**形容詞的修飾語** や **副詞的修飾語** を被修飾語（述語そのもの）より１字分**字下げ**することでそのことを表しています。

※上の図では修飾語の右肩に小さな字で「➡学生」などの注釈を付けて被修飾語を示していますが、字下げによって関係が明確になっている場合には注釈を付ける必要はありません。

あらためて文全体の構造を示すと次のようになります。

③(1) 名詞文・改訂版



③(2) 形容詞文・改訂版



③(3) 動詞文・改訂版



見てのとおり、**事象部** が表している**事象**は 肯定などの判断 の対象となっているわけですが、それは**修飾語**が存在しない場合にも言えることです。そこで今後は修飾語の有無を問わず **事象部** の枠で囲むことにします。

蛇足になりますが、国文法では **名詞** のことを「**体言**（たいげん）」、**動詞** や **形容詞**（いわゆる形容動詞も）のことを「**用言**（ようげん）」と呼びますので、**形容詞的修飾語** を「**連体修飾語**」、**副詞的修飾語** を「**連用修飾語**」と呼びます。

0.3.2　判断に対する修飾（観念的な自己分裂）

例文
④(1) 彼は おそらく　東大の学生 だろう。
④(2) 彼は おそらく　とても若い だろう。
④(3) 彼は おそらく しっかり働く だろう。

今回は③の各文に「おそらく」が追加されています。とりあえず図にしてみましょう。



さて、ここで追加された おそらく は、文内のどの部分を修飾しているのでしょうか。この疑問を解消するため、だろう／でしょう を含んだ文を発するときに**発信者の認識**がどう働くかを考えてみましょう。

３つの文を同時に考えると大変ですので、まずは**(1)**の名詞文だけを考えます。それも、おそらく なしの「彼は東大の学生だろう／でしょう。」を例にとります。

この文では、発信者は 彼は と話し始めるとすぐに 東大の 学生 と続けます。それは発信者が［彼＝東大の学生］というイメージを頭に思い浮かべているからなのですが、このとき発信者は**観念**（≒気持ち）のうえでは**その内容が真実であるような世界**に入り込んでいます。「入り込む」というのがわかりにくいかもしれませんが、テレビでアニメやドラマを見ているときに誰もが経験することだと言えば伝わるでしょうか。

発信者が次に行うのは、その内容を真実であると**肯定**することです。それは日本語では「**だ**」「**です**」などの**助動詞**によって表わされます。

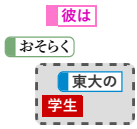
さて、この発信者は「その内容が真実であるような世界に入り込んでい」て、その内容をとりあえず肯定したわけです。しかし、**その肯定判断についてさらに何か述べようとする場合、その「世界」にいつづけるわけにはいきません。**これもアニメやドラマを見ているときと同じで、「よくできたストーリーだな」「全然リアルじゃない」あるいは「そろそろ予算が尽きたのかな」などと思うのは、その「世界」から抜け出したとき、いわば**我に返った後**のことでしょう。

そこでこの文の発信者も自分がいったん肯定したその「世界」から抜け出して、それを**外から観察できるような位置**に移動します。そうすることで初めてこの発信者は、彼は 東大の 学生 だ という自らの 肯定 判断について評価できるようになります。つまり、文末にある「だろう／でしょう」は実は「だろ／でしょ」+「う」であって、その「だろ／でしょ」(「だ／です」の**未然形**（みぜんけい）) が「世界」の**内側**での 肯定 判断を、最後に残った「う」が「世界」の**外側**からの**推量**を、それぞれ表しているわけです。

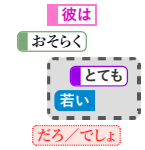
ここまで考えてくると、この**「う」こそが** おそらく **の修飾対象であること**が明確になります。形容詞文と動詞文についても同様です。つまり、最初に掲げた３つの図は書き直す必要があることになります。

そこで、まず だろう／でしょう を だろ／でしょ と う とに分け、「おそらく」が う だけを修飾していることを明確にするために特に位置関係を調整してみましょう。すると、たとえば

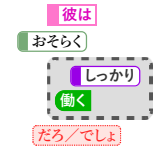
④(1) 名詞文・調整後



④(2) 形容詞文・調整後



④(3) 動詞文・調整後



のようになります。あらためて図を観察すると、発信者は 事象部 に書かれた**事象**を**対象**として 肯定 判断し、その肯定された内容を 推量 しているのだということがわかります。

※だろ は正確には で あろ の２語から成るものですが、本書では特に必要がないかぎりひとまとめにして扱います。

※です は だ の丁寧形というべきものです。

※です によく似た ます の方は、正確には、**肯定判断**を表すゼロ記号 ∅ に**丁寧**を表す「**ます**」が付いたものだと考えられます。これは、後で**完了**の た を扱うときとの兼ね合いが理由です。そのため、**「ます」には肯定判断は含まれない**と本書では考え、今後は ます ではなく ∅ます と表示することにします。

このように、人間は**観念的な自己分裂**によって**架空の自分**を作り出し、その「架空の自分」が「**世界**」から「世界」へと**観念的に渡り歩いて**いきます。そして、日本語には、そのような**過程的構造**の大半が助動詞などの語として表現されるという特徴があります。この「**人間の観念的な自己分裂**」という考え方は、70年以上前に三浦つとむによって唱えられたものですが、残念なことに学界ではあまり評価されてはいないようです。しかし、これは極めて重要な見方であると考えられますので、本書では**文構造分析の基本原理**として活用していきます。

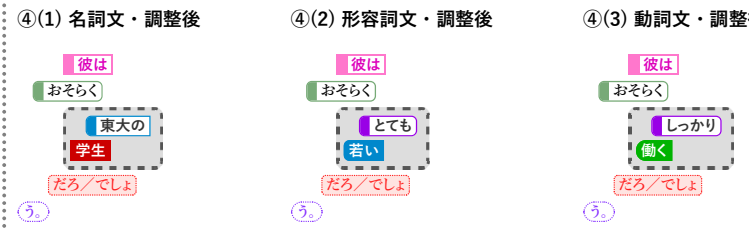
なお、今回登場した「おそらく」のような語のことを国文法では「**陳述副詞**（ちんじゅつ）」と呼びます。名前に「副詞」の２字が含まれていますが、あくまでも**判断を表す語句を修飾する**ものですから、本書では 事象部 の内部で使われる通常の 副詞 とは明確に区別します。

0.4　助動詞の働き（代表的な判断）

0.4.1　文構造の表し方を再検討する

「世界」の入れ子を可視化する

さて、前項の３つの文



ですが、せっかく登場した「**世界**」に関する考え方が活かしきれていません。

また、これまで**主語**として扱ってきた 彼は ですが、これは 肯定 や 推量 などのための**条件・範囲**といったものを表すものであり、**文末までの全体**に対応しているのではないかと考えられるのです（この点は**0.5.3**で再考します）。そこで、これらの考え方が明確になるように図の表現方法をグレードアップすることにしましょう。



新しい図では だろ／でしょ で終わる**紫色の枠**が 事象部 を囲んでいます。これは発信者の頭の中にある 推量される世界 の範囲を示していますので、色も う に合わせました。外側の**赤い枠**は 発信者がいる(現実の)世界 を表します。これらの枠のことを本書では「**世界枠**」と呼びます。

このようにすることで、「どんな**条件・範囲**において、どんな**世界**の中でどんな**対象**を見てどんな**判断**をしているのか」という構造が把握しやすくなります。

※なお、この 事象部 → 推量される世界 → 発信者がいる世界 という入れ子は、本来ならば上（手前）に重ねる方がヨリ的確なのですが、それをわかりやすく作図するのはなかなか面倒ですので、次善の策として「外から囲む」という見せ方にしています。

ここまでの例文の図をすべて改訂する

せっかくですので、例文①②③の図も同じ要領で改訂し、④と一緒に並べてみましょう。ただし、スペースの関係で【世界】の種類はいちばん複雑な④だけに記載します。

①(1) 名詞文・改訂版



①(2) 形容詞文・改訂版



①(3) 動詞文・改訂版



②(1) 名詞文・改訂版



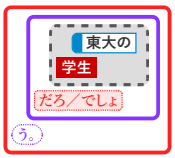
②(2) 形容詞文・改訂版



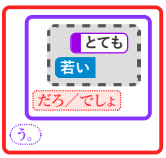
②(3) 動詞文・改訂版



③(1) 名詞文・改訂版



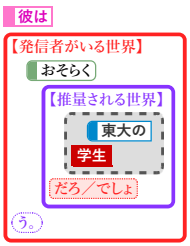
③(2) 形容詞文・改訂版



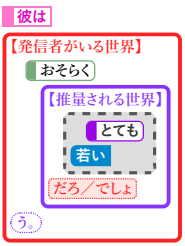
③(3) 動詞文・改訂版



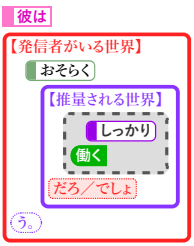
④(1) 名詞文・改訂版



④(2) 形容詞文・改訂版



④(3) 動詞文・改訂版



文の中心には**事象**を表す部分つまり 事象部 があり、その周囲には各種の「**世界**」が**入れ子**になって**判断部**を形成しています。

0.4.2　否定の場合

例文
⑤(1) 彼は　東大の学生 でない。
⑤(2) 彼は　あまり若く　ない。
⑤(3) 彼は しっかり働か　ない。

今度は**否定**（**打消**（うちけし））の文を扱いましょう。否定を表すには**助動詞** (ない) を使うのですが、敬体文には複数の可能性がありますので、ここではやや緩めに

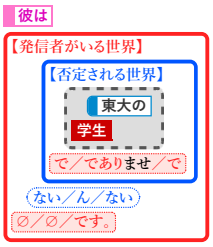
名詞文　「～～学生 **でありませ ん**」
　　「～～学生 **で　　ない です**」

形容詞文　「～～若く **あり　ませ ん**」
　　「～～若く　　**ない です**」

動詞文　「～～働き　　**ませ ん**」
　　「～～働か　　**ない です**」

としてみましょう。整合性に注意しながら図式化すると次のようになるでしょう。

⑤(1) 名詞文



⑤(2) 形容詞文



⑤(3) 動詞文



※３つの語（ゼロ記号「∅」を含む）が「／」で区切られて並んでいる部分は、対応するものをたどって読んでください。たとえば名詞文の場合には、
　左　「学生 → で → ない ∅」　（冒頭の例文）
　中　「学生 → でありませ → ん ∅」　（敬体文の１つめ）
　右　「学生 → で → ない です」　（敬体文の２つめ）
という３種類の言い方があるということを表しています。

※形容詞文については、とても の代わりに あまり を使用しています。

※名詞文や形容詞文は「学生で**は**ない」「若く**は**ない」とも言えますし、その関係で学校文法ではそれらの「ない」は**補助形容詞**とされています。また同様に、名詞文の（「で」に続く）「ある」は**補助動詞**とされています。しかし、いずれも**判断を表すという特殊性**を持っていますので、本書では時枝や三浦に従って**助動詞**と考えておきます。

0.4.3　過去の場合

例文
⑥(1) 彼は　東大の学生 だった。
⑥(2) 彼は　とても若く あった。
⑥(3) 彼は しっかり働い　た。

今度は**過去**の文を扱いましょう。過去を表すには**助動詞** (た) を使うのですが、敬体文は

名詞文　「〜〜学生 **でし　た**」
×「〜〜学生 **だっ　た です**」　←認めない

形容詞文　「〜〜若く **あっ　た です**」
×「〜〜若い **でし　た**」　←認めない

動詞文　「〜〜働き　**まし た**」
×「〜〜働い　**た です**」　←認めない

としてみましょう。整合性に注意しながら図式化すると次のようになるでしょう。

⑥(1) 名詞文



⑥(2) 形容詞文



⑥(3) 動詞文



※いずれも「事象 → 肯定 → 過去 肯定」というつながりになっています。

※よく考えてみると、上で「認めない」とした言い方なども同じパターンに当てはめることができます。その意味でそれらの表現も**合理性**を持っているわけで、日本語学習中の外国人がその種の言い方をしたとしても何ら不思議ではありません。にもかかわらずそれらの言い方が「正しくない」とされるのは、**言葉のルールを決めているのが合理性ばかりではない**からでしょう。実際、正しくないはずの言い方であっても、何度も言ったり聞いたりしているうちに違和感が薄れてきますので、ルールの中には**慣れや馴染み**をベースとしたものが少なくないということがわかります。

※**形容詞** 若く ＋ **助動詞** あっ の部分は実際には「わかかっ」と発音されます。

※形容詞文については、「若いです」同様に「若かったです」のような言い方は標準的ではないという説もありますが、ここではこの言い方も認めることにします。

0.4.4　否定と過去を組み合わせる

例文
⑦(1) 彼は　東大の学生 でなくあった。
⑦(2) 彼は　あまり若く　なくあった。
⑦(3) 彼は しっかり働か　なくあった。

今度は**否定**と**過去**が組み合わさった文を扱いましょう。**助動詞** (ない) と (た) との組み合わせですが、敬体文は

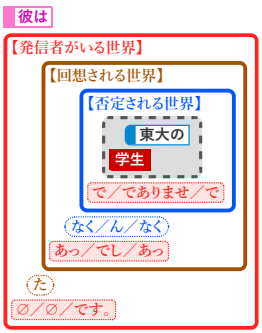
名詞文　「〜〜学生 **でありませ ん　でし た**」
　　「〜〜学生 **で　なく あっ た です**」

形容詞文　「〜〜若く **あり　ませ ん　でし た**」
　　「〜〜若く　**なく あっ た です**」
　　×「〜〜若く　**ない でし た**」　←認めない

動詞文　「〜〜働き　**ませ ん　でし た**」
　　「〜〜働か　**なく あっ た です**」

としておきます。整合性に注意しながら図式化すると次のようになるでしょう。

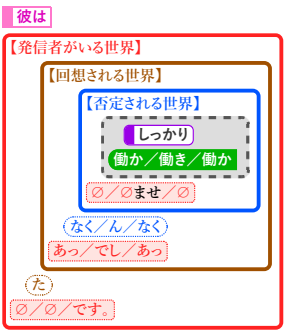
⑦(1) 名詞文



⑦(2) 形容詞文



⑦(3) 動詞文

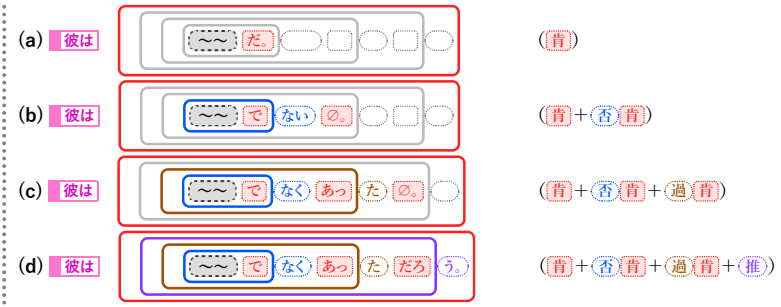


※いずれも「事象 → 肯定 → 否定 肯定 → 過去 肯定」というつながりになっています。
※**助動詞** (なく) ＋ **助動詞** あっ の部分は実際には「なかっ」と発音されます。

0.4.5　否定の過去の推量なら？

例文
⑧(1) 彼は おそらく　東大の学生 でなくあっただろう。
⑧(2) 彼は おそらく　あまり若く　なくあっただろう。
⑧(3) 彼は おそらく しっかり働か　なくあっただろう。

では、**否定**と**過去**と**推量**が組み合わさったらどうなるでしょうか。使う**助動詞**は登場順に(ない)、(た)、(う)です。名詞文で基本的な流れを見ると次のようになります。



※(c)(d)の (なく)+(あっ) は実際には「なかっ」と発音される。
※(否定)+(推量) や (過去)+(推量) についても同じ図式で考えることができる。
※グレイの線は他の図と比較しやすくするための目印として入れているだけであり、それ自体としての意味はない。

まず、(a)は単なる**肯定**判断の文です。助動詞 だ を使用しています。**発信者がいる世界**を表す赤色の世界枠をいちばん外側に置いています。(もっと内側でもよいのですが、他の図と線の位置を統一しています。)

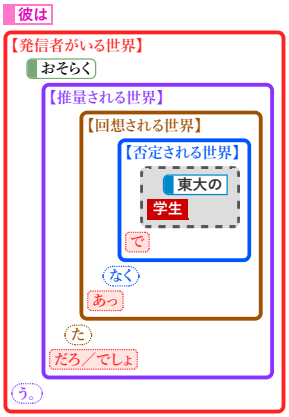
(b)はそれを**否定**するために助動詞 (ない) を追加したものです。その助動詞があるのは**発信者がいる世界**ですし、敬体文では文末に です が付くこともありますので、いちばん外側に赤色の世界枠があります。

(c)はそれを**過去**にするために助動詞 (た) を追加したものです。ここでも同様の理由で赤色の世界枠がいちばん外側にあります。

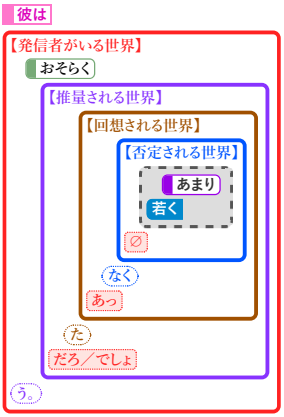
(d)はそれを**推量**するために助動詞 (う) を追加したものです。ここは敬体にしても です が付くことはありませんが、**発信者がいる世界**であることに違いはありませんから、それを示すために赤色の世界枠がいちばん外側にあります。

以上は名詞文の場合ですが、形容詞文や動詞文でも要領は同じです。それらの構造図は次のようになります。(参考までに、例文中で使用している 形容詞 / 動詞 / (助動詞) の活用を掲げておきます。)

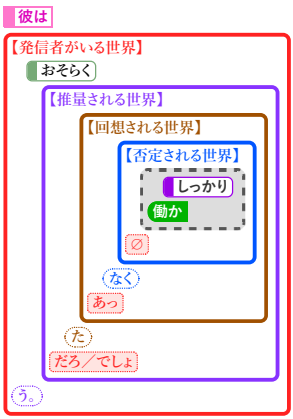
⑧(1) 名詞文



⑧(2) 形容詞文



⑧(3) 動詞文



形容詞 / 動詞 / 助動詞 の活用

	未然	連用	終止	連体	仮定	命令
若い	-く 注1	-く 注2	-い	-い	-けれ	－
働く	-か -こ	-き -い	-く	-く	-け	-け
ある	あら	あり	ある	ある	あれ	あれ
だ	で 注3	で 注4	だ	(な)	なら	－
です	でしょ	でし	です	(です)	－	－
ない	なく 注5	なく 注6	ない	ない	けれ	－
ぬ	－	ず	ん	ん	ね	－
た	たろ	－	た	た	たら	－
う	－	－	う よう	(う) (よう)	－	－

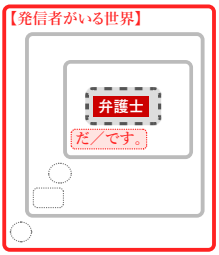
※注１：「-かろ」は「-く＋あろ」
注２：「-かっ」は「-く＋あっ」
注３：「だろ」は「で＋あろ」
注４：「だっ」は「で＋あっ」
注５：「なかろ」は「なく＋あろ」
注６：「なかっ」は「なく＋あっ」 と考え割愛。

言うまでもないことですが、若い は**形容詞**、働く は**動詞**、そして ある だ です ない ぬ た う は**助動詞**です。また、学生 は**名詞**ですから活用しません。

0.4.6　過去と未来の比較

まず、次の４つの構造図を見て、（た）と（う）の働きを再確認してください。

(1) 現在



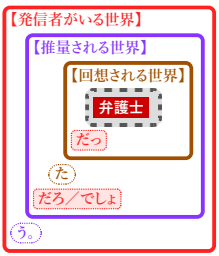
(2) 現在の推量



(3) 過去

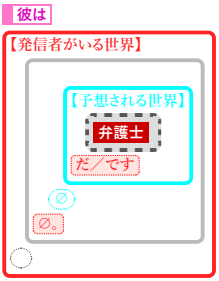


(4) 過去の推量

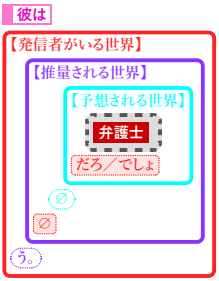


さて、ここで**過去**の事象と同様に**未来**の事象について語ろうとすると、**過去**の場合における（た）に相当するものが**未来**にはないという事実に気が付きます。そこでその部分を**見えない助動詞**だと考えて**ゼロ記号**（∅）で表すと、次のような図になります。

(5) 未来



(6) 未来の推量



(5)(6)（未来）の**外見**は**(1)(2)**（**現在**）と同じですから、「日本語には**未来形がない**」と言えます。また、**(5)(6)**（未来）の**認識内容**は**(3)(4)**（**過去**）と**そっくり**ですから、「日本語にも**未来認識はある**」と言えそうです。ここで**表現形式**を基準にして「**未来形**がないから**未来時制**もない」と考える人も多いようですが、**言語は認識を表現したもの**なのですから、**表現形式**より**認識内容**が重視されるべきでしょう。そこで本書では、「**未来認識**がある以上、**未来時制**もある」と考えます。なお、必要であれば**ゼロ記号**「∅」を使用して**認識**・**表現**間の整合性を図ります。

0.5　助詞の働き（品詞変更①と係り受け②）

注：ここから先は敬体文の例を省きます。また、原則として【世界】の種類は表示しません。

0.5.1　修飾語を作る

例文
⑨ 今回は 彼が 彼女に 校庭で 手紙を 渡し た。

まず、助詞「は」「が」「に」「で」「を」の働きを明確に表示してみます。



図の中に「場所を表す」などの注釈を入れておきましたが、彼女 に、校庭 で および 手紙 を は 渡し という動詞を修飾していますので、名詞 に に、で、を が付くことによって 副詞的なカタマリ となり 副詞的修飾語 として働いていると考えることができます。それは厳密には 彼女 に のように表すべきものですが、通常は少し簡略化して 彼女 に のように表せば十分です。

※残る は と が の働きについては少し後で解説します。

さて、単語の分類のうち 名詞 形容詞 動詞 副詞 助詞 助動詞 …のことを「品詞」と呼びます。また、修飾語は被修飾語との間に特別な関係を持っていますが、そのような関係を「格」と呼び、専用のデザインで表します。そして、助詞 のうち格に関わるものを特に 格助詞 と呼びます。

なお、「毎日」のように 名詞 がそのままの姿で 副詞的修飾語 として働くこともありますが、そのような場合にはゼロ記号の一種である見えない格助詞 ∅ が隠れている（ 毎日 ∅ という構造になっている）と考えることができます。

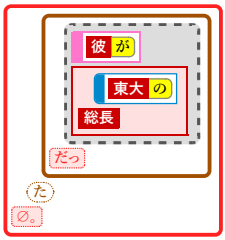
※品詞のうち、名詞・動詞・形容詞・副詞 などを「客体的表現」と呼び、助詞・助動詞 などを「主体的表現」と呼びます（時枝）。構造図ではそれぞれの書体をゴシックと明朝にして区別しています。

0.5.2　主語や目的語を作る

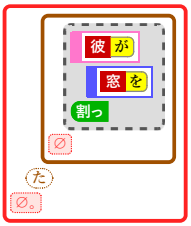
例文
⑩(1) 彼が 東大の 総長 だっ た。
⑩(2) 彼が 窓を　割っ　　た。

これらの文は、次のような構造であると考えられます。

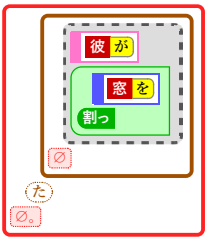
⑩(1) 名詞文の一例



⑩(2) 動詞文の一例



⑩(3) 動詞文の一例・別案



本題に入る前に、(1)にある 東大 の 総長 という部分に関してですが、外側にある 枠 は 東大 の が 総長 を修飾することによって生じた 名詞的なカタマリ を示しています。(2)の場合、彼が 窓を 割っ の語順を 窓を 彼が 割っ に変えても事実関係は変わりませんが、(1)の 彼が 東大の 総長 を 東大の 彼が 総長 に変えると事実関係が変わってしまいます。つまりそこには**入れ子構造**があると考えられますので、そのことを示すためにこの 枠 を追加しました。なお、東大 に の が付いたカタマリは 形容詞的なカタマリ となり 形容詞的修飾語 として働いています。

さて、(2)の図では、彼 が の相手は 割る という**動詞**ですから、彼 が は 副詞的修飾語 として働いていると考えることも可能です。しかし、(1)の場合、彼 が が係る相手は 東大 の 総長 という**名詞的な要素**ですから、**その関係は修飾関係とは違う**と考えられます。それがつまり「**主語**」としての特別な関係（**主述関係**）です。そしてこのカタマリは、他の語句（たとえば「昨日先生が教えてくれた」のようなもの）で修飾することはできません。主語 はこれまでも使ってきましたが、特別扱いすべき明確な理由があるわけです。主語 を字下げしていないのはそのためです。なお、主語が持っている**格**のことを「**主格**」と呼びます。

※(2)についても(3)のように書いた方が表記が一貫すると考えられますので、今後はこの記法を積極的に活用します。

さらに、動詞文については「～**を**」に対して 目的語 という**要素**を使っています。国文法では 目的語 は 修飾語 の一種とされるのが普通ですが、英文法への準備を兼ねて特別なラベルを用意しました。また、今後に備えて 任意の副詞的修飾語 とは別に 必須の副詞的修飾語 が使えるように用意してあります（任意 ⇔ 必須）。以上のような「係る」働きをする要素のことを本書では「**係り要素**」と呼びます。なお、英文構造では 間接目的語 などの要素も登場します。

0.5.3 「は」と「が」

基本パターン

例文

⑪(1) 太郎君たちが 来 た。（単にそれだけ。）
⑪(2) 太郎君たちが 来 た。（来たのは太郎君たちだった。）　※「が」を強く言う
⑪(3) 太郎君たちは 来 た。（その点が太郎君たちに共通すること。）
⑪(4) 太郎君たちは 来 た。（来なかった人もいるけれども。）　※「は」を強く言う

⑪(1) 個別的判断（中立叙述）



（属性・状況ごとのメンバー）

来た
太郎君たち　（他は考えない）

来なかった
（何も考えない）

(1)は、太郎君たちが来たという**個別的**な事実をシンプルに取り上げていて、他の人や事情には触れていません。そのため「何が起こったか？」のような質問に対する答えになります。これは「**中立叙述**」などと呼ばれます。

※主語「太郎君たちが」に含まれる 名詞 と 格助詞 ですが、一方が他方に係っているわけではない以上、主従関係は存在しないと考えられます。そこで本書の構造図では、これらを縦に並べるときには**双方を**右に**0.5字ずつ**ずらして配置しています。

⑪(2) 個別的判断（排他）



（属性・状況ごとのメンバー）

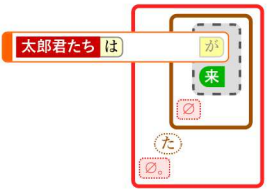
来た
太郎君たち　（他にはいない）

来なかった
太郎君たち以外の全員

(2)の場合、来たのは限られた人たち**だけ**で、それが太郎君たちなのだと言っています。つまり、「来た」という事実を、太郎君たちだけが持っているもの（**個別性**）として取り上げています。そのためこの文は、「誰が来たか？」「来たのは誰か？」のような質問に対する答えとして使われます。これは「**排他**」あるいは（該当するものすべてを示すことから）「**総記**」などと呼ばれます。このとき発信者はこの主語が持つ**排他性**を認識するために 世界 **の外から他者と比較する視点**を持っているはずですので、太郎君たちが を左外に置くことによってそのことを示しています。

※ここでは**(2)が持つ特殊な構造**を明確にするために「**階層跨がらせる**」という**特殊なレイアウト**を使っています。このレイアウトを含んだ図のことを**跨図**」と呼ぶことにしましょう。

⑪(3) 普遍的判断（主題）



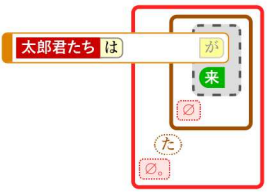
（属性・状況ごとのメンバー）

来た
太郎君たち　（他にいてもよい）

来なかった
（いてもいなくてもよい）

(3)では は が登場します。これは、「来た（という事実がある）」という点を太郎君たちの間に共通すること（**普遍性**）として取り上げています。そのため、「太郎君たちはどうだったか（来たか来なかったか）？」のような質問に対する答えとして使われます（もちろん太郎君たち以外にも誰か来た可能性はあります）。これは「**主題**」などと呼ばれます。図では が を薄くして、左に延長した部分で は を付加しています。

⑪(4) 特殊的判断（対比）



（属性・状況ごとのメンバー）

来た
太郎君たち　（他にいてもよい）

来なかった
（誰かいるはず）

(4)も太郎君たちの間の共通点（**普遍性**）を取り上げているのですが、同時にその共通点を持たない人たちの存在を想定し、その人たちとの違い（**特殊性**）を意識しています。普遍性を**特殊性**として取り上げているわけです。そのため、「来なかった人もいるようだが、太郎君たちはどうだったか（来たか来なかったか）？」のような質問に対する答えとして使われます（もちろん太郎君たち以外にも誰か来た可能性はあります）。これは「**対比**」「**対照**」などと呼ばれます。図は**(3)**と同様の配置で、デザインだけ変更しました。

ここまでの４つは次のようにまとめることができるでしょう。

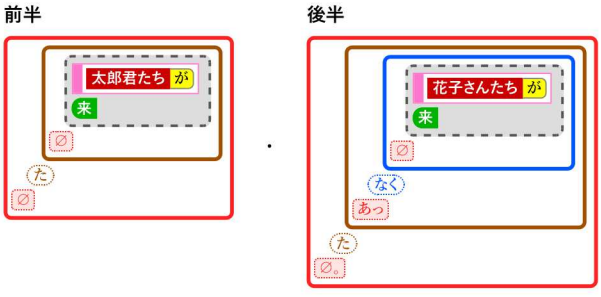
(1) **個別的判断**の が … **個別的な事実**について述べる　（**中立叙述**）
(2) **個別的判断**の が … 太郎君たちが持つ**個別性**について述べる　（**排他**）
(4) **特殊的判断**の は … 太郎君たちが持つ**特殊性**について述べる　（**対比**）
(3) **普遍的判断**の は … 太郎君たちが持つ**普遍性**について述べる　（**主題**）

対比を明確にする場合

これらは(4)において背景事情に含まれる 対比 を明示する場合の文です。

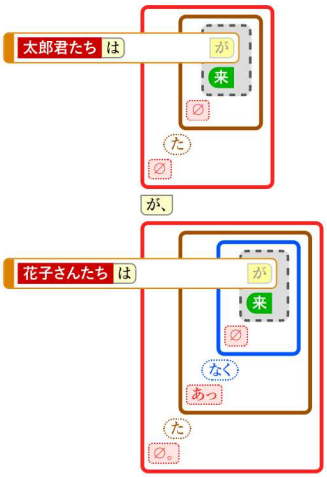
例文
⑪(5) 太郎君たちは 来た が、花子さんたちは 来 なかった。

この文の背景事情は



のように表せるでしょう。そこから前半部の 太郎君たち と後半部の 花子さんたち を 対比 にするため左側に伸ばして「架橋」させると、次のように図式化できます。

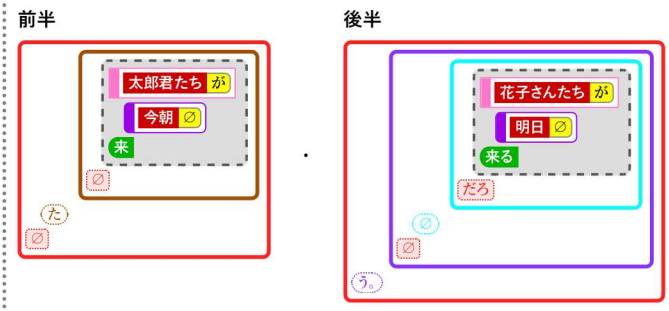
⑪(5)



(5)では、[太郎君たち＝来た] の 肯定 と [花子さんたち＝来なかった] の 肯定 とを対比している。対比の一方が否定を含むため入れ子の深さが違っている。なお、なく+あっ は実際には「なかっ」と発音される。

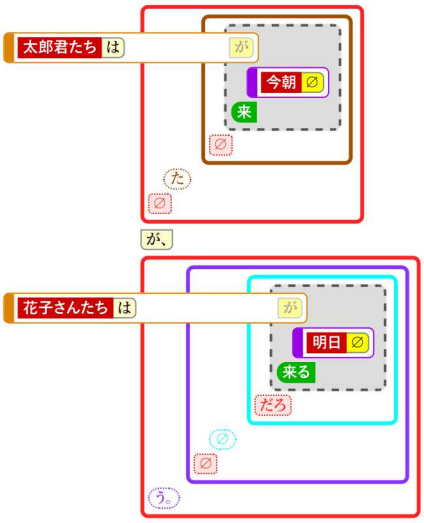
例文
⑪(6) 太郎君たちは 今朝 来た が、花子さんたちは 明日 来る だろう。

この文の**背景事情**は



のように表せるでしょう。そこで(5)と同様に図式化することができます。

⑪(6)



(6)では、［太郎君たち＝今朝来た］の 肯定 と［花子さんたち＝明日来るだろう］とを対比している。今朝 と 明日 については、それぞれの語が受信者を 回想される世界 や 予想される世界 に誘う働きをしているという側面があるが、それは図に反映していない（とりたててメリットがないと思われるため）。

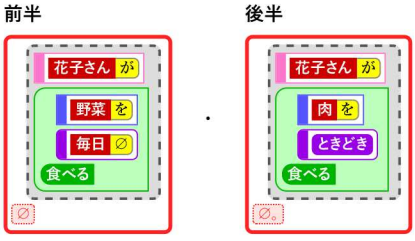
(5)(6)のどちらにも 赤色の世界枠 が２つずつありますが、これらは 太郎君たち および 花子さんたち それぞれに対応した**部分的な世界**であると考えられます。

主題と対比の組み合わせ

また、主題 と 対比 とが組み合わさったものも考えることができます。主題 と 対比 とが階層構造になっていることと、何と何とが対比されているかということに注目してください。

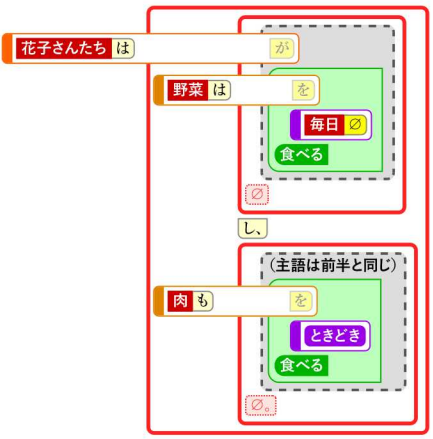
例文
⑪(7) 花子さんは、野菜は 毎日 食べる し、肉も ときどき 食べる。

この文の背景事情は



のように表せるでしょう。そこから 花子さん を前半後半共通の 主題 にするため左側に伸ばして「架橋」させるとともに、前半部の 野菜 と後半部の 肉 を 対比 にするため左側に伸ばして「架橋」させると、次のように図式化できます。

⑪(7)

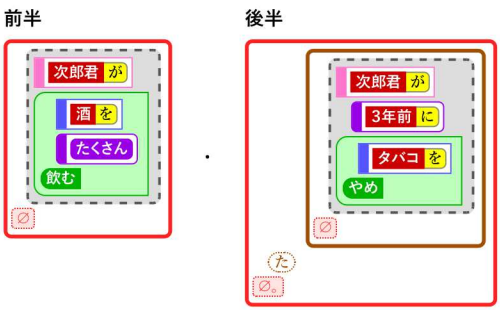


(7)では、食べる頻度という側面を花子さんが持つ普遍性として取り上げ、その中で、食べ物ごとの特殊性を対比させている。

※ここでは 主語 ではなく 目的語 を 対比 にしている。

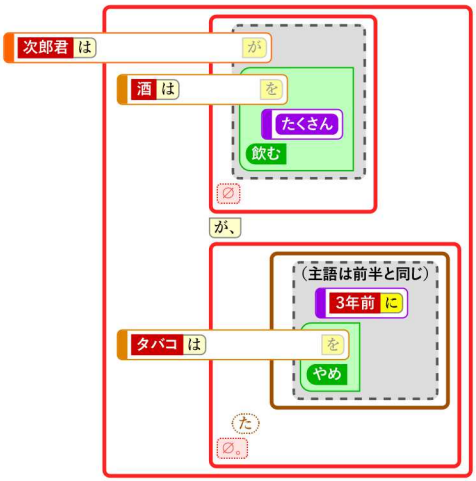
例文
⑪(8) 次郎君は、酒は たくさん 飲む が、３年前に タバコは やめ た。

この文の**背景事情**は



のように表せるでしょう。そこで(7)と同様に図式化することができます。

⑪(8)



(8)では、習慣の現状を次郎君が持つ**普遍性**として取り上げ、その中で、嗜好品ごとの**特殊性**を**対比**させている。対比の一方が過去の事実であるため入れ子の深さが違っている。

なお、前項までに登場した例文の「彼は」についても、文脈に応じて 主題 あるいは 対比 を表すものとして見直す必要があります。

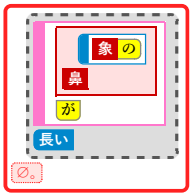
0.5.4 「象は鼻が長い」

例文
⑫ 象は 鼻が 長い。

これは は と が とが組み合わさったもので、日本語に特徴的なパターンとしてよく知られています。「象は鼻が長い。」が有名であることから、「**象鼻文**」などと呼ばれています。

基本となる背景事情は次のように表せます。

背景事情



※この図から考えると、今回のテーマ「象は 鼻が 長い。」は「象は **その**鼻が 長い。」と表現した方が正確だと言えそう。実際、モンゴル語ではそのように表現されることが多いとのこと。

※なお、「象は鼻が長い。」における「鼻」は象の一部であるが、そのような関係がいつも成り立っているわけではない。たとえば「紳士は金髪がお好き。」の「金髪」は紳士の一部ではない。

文中の 象 が 象 は（主題）あるいは 象 は（対比）として使われるわけですが、このとき「鼻が長い」「鼻が長くない」という属性のメンバーは次のようになります。

は が主題　（見た目）　象 は

（属性ごとのメンバー）

鼻が長い	鼻が長くない
象 （他にいてもよい）	（いてもいなくてもよい）

は が対比　（見た目）　象 は

（属性ごとのメンバー）

鼻が長い	鼻が長くない
象 （他にいてもよい）	（何かいるはず）

また、鼻 が は**中立叙述**のままか**排他**として使われますが、このとき「長い」「長くない」という属性のメンバーは次のようになります。

が が中立叙述　（見た目）　鼻 が

（属性ごとのメンバー）

長い	長くない
鼻 （他は考えない）	（何も考えない）

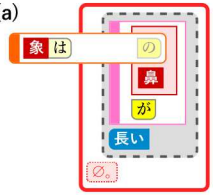
が が排他　（見た目）　鼻 が

（属性ごとのメンバー）

長い	長くない
鼻 （他にはない）	鼻以外のすべて

となります。結果として、「象は鼻が長い。」の解釈としては 2 × 2 ＝合計 4 種類の組み合わせが考えられます。

(a)



は が主題

鼻が長い
象 （他にいてもよい）

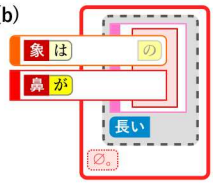
鼻が長くない
（いてもいなくてもよい）

が が中立叙述

長い
鼻 （他は考えない）

長くない
（何も考えない）

(b)



は が主題

鼻が長い
象 （他にいてもよい）

鼻が長くない
（いてもいなくてもよい）

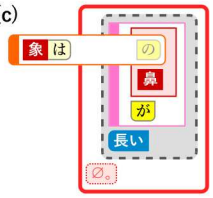
が が排他

長い
鼻 （他にはない）

長くない
鼻以外のすべて

※が を強く言う。

(c)



は が対比

鼻が長い
象 （他にいてもよい）

鼻が長くない
（何かいる）

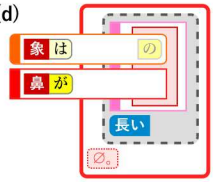
※は を強く言う。

が が中立叙述

長い
鼻 （他は考えない）

長くない
（何も考えない）

(d)



は が対比

鼻が長い
象 （他にいてもよい）

鼻が長くない
（何かいる）

※は を強く言う。

が が排他

長い
鼻 （他にはない）

長くない
鼻以外のすべて

※が も強く言う。

(a)　象としての**普遍性**　＝　「鼻が長い」ということ
(b)　象としての**普遍性**　＝　「首や足などではなく鼻が長い」ということ
(c) キリンや豚と違った象の**特殊性**　＝　「鼻が長い」ということ
(d) キリンや豚と違った象の**特殊性**　＝　「首や足などではなく鼻が長い」ということ

※最後の(d)は は と が の双方を強く言うこともあり、不自然な印象を受ける。

0.5.5　時枝の「句」と学校文法の「文節」

例文
⑬(1)　　先生は フランス人 だ。
⑬(2) 僕の　　先生は フランス人 だ。
⑬(3) 僕の英語の先生は フランス人 だ。

名詞と助詞とがセットになっている

は の前にある「〜先生」に注目すると、その構造は次のように図式化できます。

⑬(1) 元の句　　先生

⑬(2)「僕の」を追加　　僕 の　先生

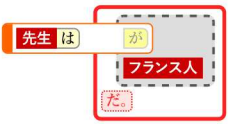
⑬(3)「英語の」を追加　　僕 の　英語 の　先生

(3)に着目すると、僕 は**名詞**（**客体的表現**の一種）で、それに付いている の は**助詞**（**主体的表現**の一種）です。英語 の についても同様です。このような**客体的表現＋主体的表現**のカタマリは**語と文との中間**にあるもので、これを時枝は「**句**」と呼びました。

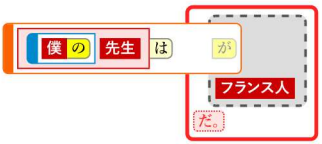
さらに、英語 の は 形容詞的修飾語 として 先生 という**名詞**を修飾して 英語 の 先生 という**名詞的な**カタマリをつくります。これも**客体的表現**の一種です。

そして、先の 僕 の という**句**が 形容詞的修飾語 としてこのカタマリを修飾します。そうやって、**入れ子構造**が複雑化していくわけです。文全体の図も掲げておきましょう。

⑬(1) 文全体



⑬(2) 文全体



⑬(3) 文全体



文節と連文節

ところで、学校文法の場合、**(3)**のような文は「僕の／英語の／先生は／フランス人だ」のように区切ったうえで、



※「➡」は「係っている」ことを表す。

のようにつながっていると説明されます。そして、そこに含まれている個々のパーツつまり僕の、英語の、先生は、フランス人だ のようなものは「**文節**」と呼ばれ、それらがつながりあってできたカタマリ（上記の 

はその一例）は「**連文節**」と呼ばれます。

しかし、ここまでの説明からも明らかなように、この文の は は 先生 という**語**にではなく 

という**カタマリ**に付いているのですから、文全体としても



ではなく



という構造として理解すべきものです。この点が、学校文法の「**文節**」と時枝的な意味の「**句**」との決定的な違いです。(ただし、**世界**を明瞭にしたのは時枝ではなく三浦です。)

時枝的な**句**が持つ入れ子構造を正しく理解しておくと、英文構造の理解にも役立ちます。

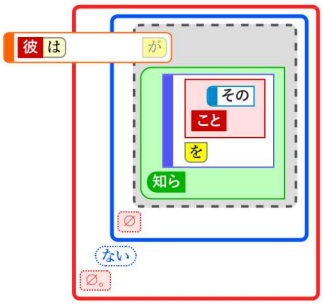
0.5.6　内部に文を含む場合

例文
⑭(0) 彼は　そのことを 知ら ない。
⑭(1) 彼は 彼女が第一志望に合格したことを 知ら ない。
⑭(2) 彼は 彼女が第一志望に合格したか　を 知ら ない。
⑭(3) 彼は 彼女がどの大学に合格したか　を 知ら ない。
⑭(4) 彼は 彼女が言語学会で発表した新説を 知ら ない。
⑭(5) 彼は 彼女が言語学会で発表したことを 知ら ない。

(0) 単純な語句が目的語である場合

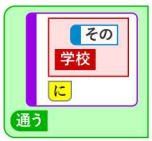
これは簡単でしょう。精細(せいさい)な構造は次のように表すことができます。

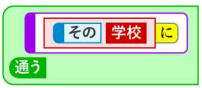
⑭(0) 文全体の精細構造

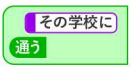


なお、本書の構造図はかなり柔軟ですので、同じ構造であっても、必要に応じて

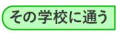
（最も精細に）







（最も簡略に）



などのように書き分けることが可能です（**0.9.5**参照）。

(1) 目的語の内部に平叙文を含む場合

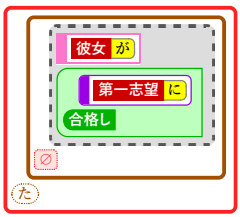
この例では、目的語 部分の粗(そ)構造は次のように表せるでしょう。

⑭(1) 目的語部分の粗構造



目的語 の中に「彼女が第一志望に合格した」という**カタマリ**が含まれています。このカタマリは**単独で文になりうるもの**（節(せつ)）で、下図のように**過去**の事実を表しています。

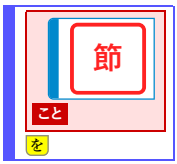
⑭(1) 節そのものの精細構造



※た の後の ∅ は認識自体が存在しないと思われますので、ここでは表示していません。

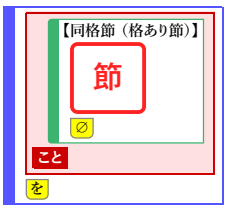
この節は**(0)**の「その」と同様に直後の こと を修飾しているように見えますので、目的語 部分全体の構造はだいたい次のようなものだと言えそうです。

⑭(1) 目的語部分の暫定版



ところが、この 節 は今のところ**格**を持っていません。もしこれが直後の こと の**内容を表す**特殊な修飾語（**同格節**）なのだとすると、発信者はそういう**意図**を隠し持っているはずです。そこで、その隠された意図を**見えない格助詞** ∅ で示すと次のようになります。

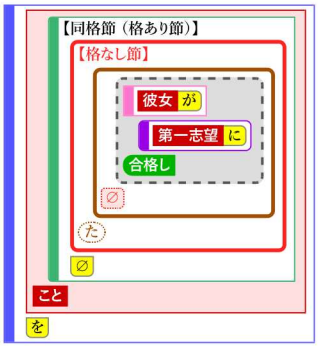
⑭(1) 目的語部分の暫定版・2



※同格節 はあくまでも修飾語であり、その中にある 節 の部分が こと と同格になっています。

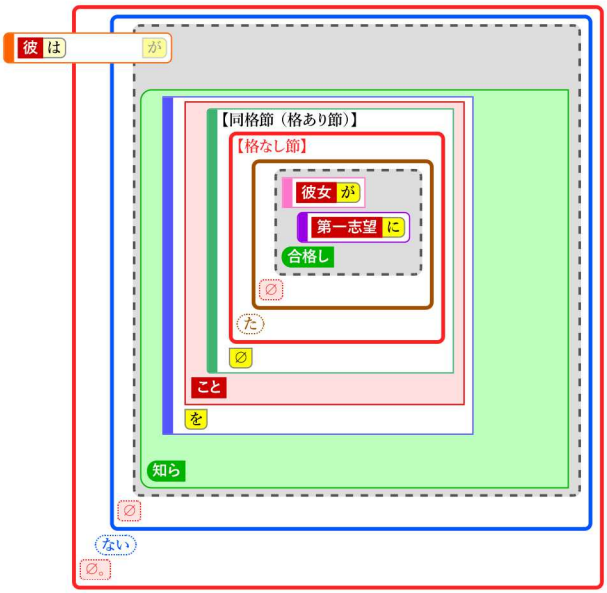
結果として、目的語 部分の精細構造は次のようなものだと考えられます。

⑭(1) 目的語部分の精細構造



文全体の精細構造は次のようになります。（ヨリわかりやすくするために、目的語 部分の周囲を少し空けてあります。）

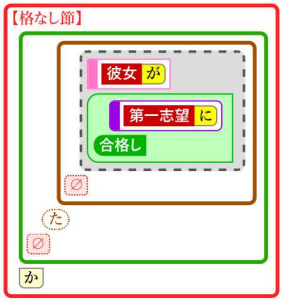
⑭(1) 文全体の精細構造



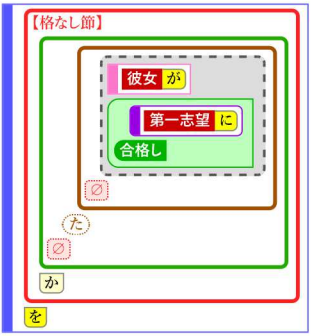
(2) 目的語の内部に疑問文を含む場合①

この例では、目的語 部分が「**彼女が第一志望に合格したか**」という**疑問文**になっています。これは「彼女が第一志望に合格した」という過去の事実が本当なのかどうかを問うものです。疑問文そのものと 目的語 部分全体の構造は次のように表すことができます。

⑭(2) 疑問文そのものの構造

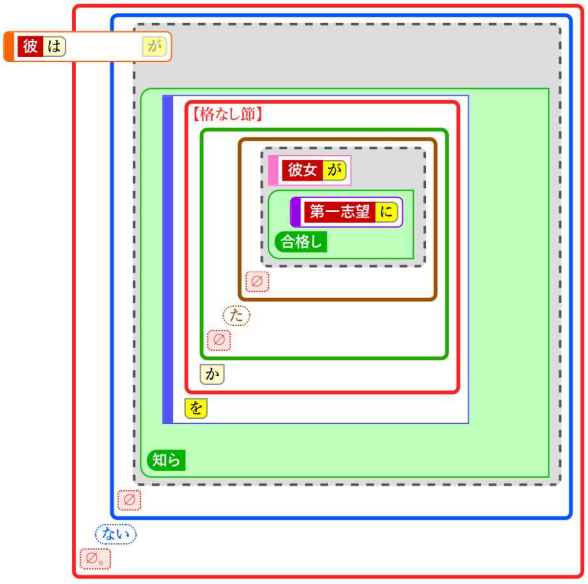


⑭(2) 目的語部分の精細構造



文全体の精細構造は次のようになります。(ヨリわかりやすくするために、目的語 部分の周囲を少し空けてあります。)

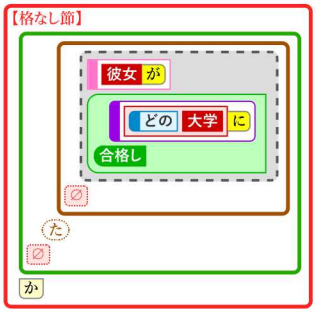
⑭(2) 文全体の精細構造



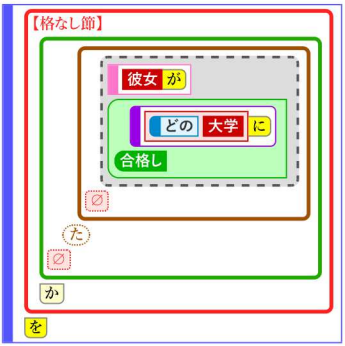
(3) 目的語の内部に疑問文を含む場合②

今度は、彼女が合格した大学を知ろうとする場合の疑問文です。日本語では、(2)において 第一志望 となっている部分に どの 大学 を入れるだけです（これは日本語の便利なところです）。その結果、疑問文そのものと 目的語 部分全体の構造は次のようになります。

⑭(3) 疑問文そのものの構造

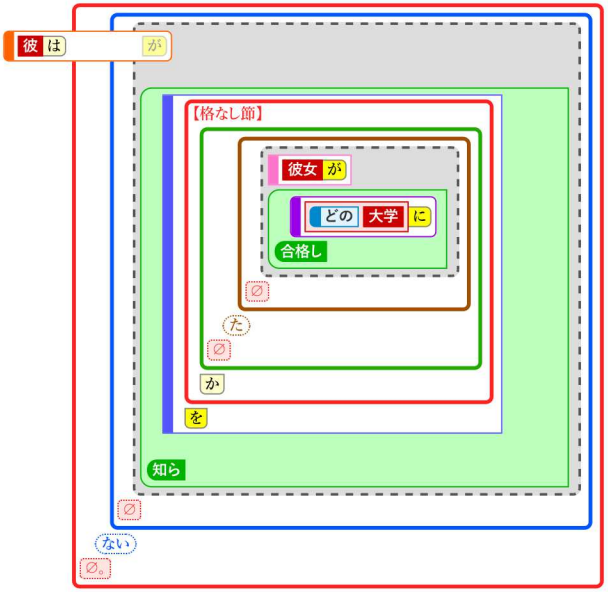


⑭(3) 目的語部分の精細構造



文全体の精細構造は次のようになります。（ヨリわかりやすくするために、目的語 部分の周囲を少し空けてあります。）

⑭(3) 文全体の精細構造



(4) 節の内部と外部との間に関係がある場合

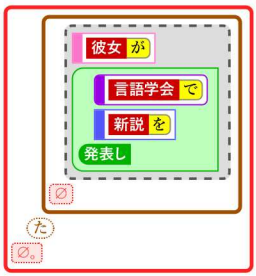
次は 目的語 部分が「**彼女が言語学会で発表した新説**」の場合です。この「彼女が言語学会で発表した」は明らかに「新説」を**修飾**していますので、

⑭(4) 目的語部分の粗構造



であると想像できます。ところが、この表現の**背景事情**は

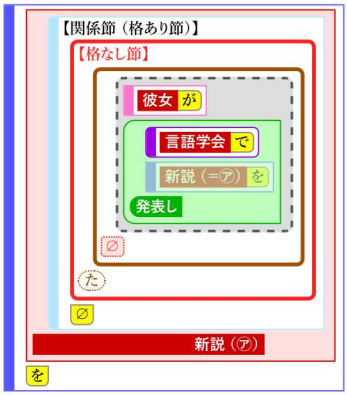
⑭(4) 推定される背景事情



でしょう。そして、その中で発表内容として位置づけられている「新説」について説明しようとするときに、「**彼女が言語学会で発表した新説**」という言い方をするわけです。

つまりここでは発表内容を示す「新説」という語が「彼女が言語学会で発表した」という**節から飛び出している**わけで、この「新説」は**節の外部と内部とを結びつける**ものとなっています。図は次のようになるでしょう。

⑭(4) 目的語部分の精細構造



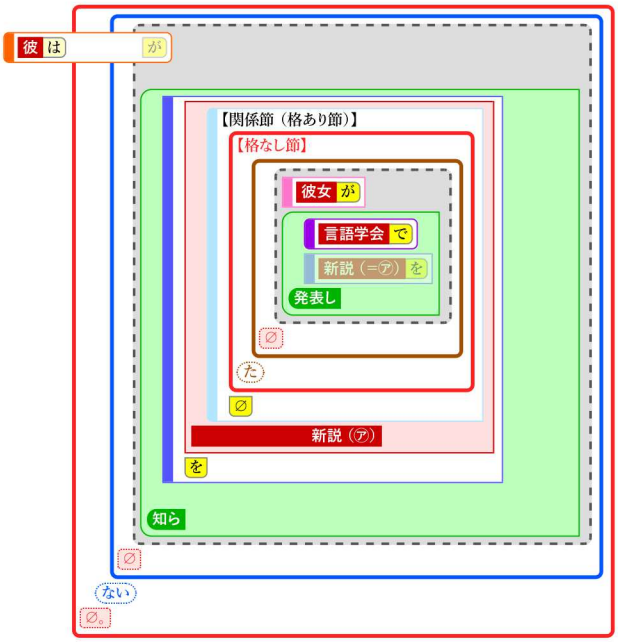
事象部 にある 新説（=ア）を が薄く（ 新説（=ア）を のように）なっていますが、これは

「背景事情を表す文であればこの要素がここに置かれる（が、実際にはない）」という意味です。そしてその 新説（＝㋐） は後に出てくる 新説（㋐） と**同じ対象**を指していますので、そのことを「㋐」と「＝㋐」で明示するとともに、左右位置を調整しています。

このような関係は**(1)(2)**にはない特殊なものです。そこで、このような関係を含んだ修飾節のことを本書では「**関係節**」と呼ぶことにします。

最後に文全体の精細構造は次のようになります。（ヨリわかりやすくするために、 目的語 部分の周囲を少し空けてあります。）

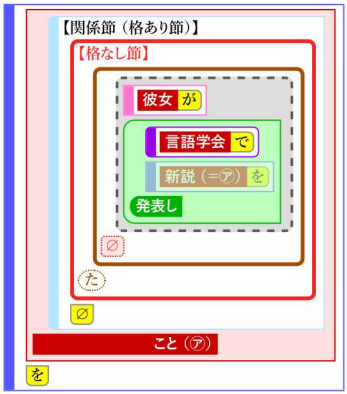
⑭(4) 文全体の精細構造



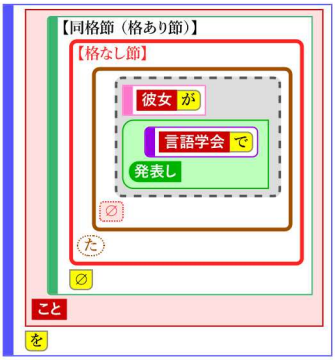
⑸ どちらのタイプか不明確な場合

ここでは(4)の「新説」を「こと」に置き換えていますが、この場合は意味が曖昧になります。目的語 部分を比較しましょう。

⑭(5) 関係節を含むものとして解釈



⑭(5) 関係節を含まないものとして解釈



左の図では、発表した新説を「こと」と表現している点が(4)とは異なりますが、意味や構造は同じであり、関係節を含んでいます。事象部 内に 新説（＝ア） を が表示されていることと こと（ア） の特殊な配置がそれを示しています。

一方、右の図では「彼女が言語学会で発表した」という事実を「こと」と表現しています。この「こと」は(1)と同じ使い方であり、関係節を含んでいません。

以上、いくつかの節タイプを扱ってきましたが、同様の区別が英文でも登場します。まずは和文でしっかり理解しておきましょう。

0.6　接尾語の働き（品詞変更②）

ここでは 動詞 の後に続く「れる」「られる」、「せる」「させる」そして「たい」をとりあげます。

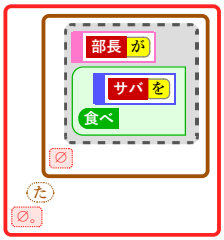
0.6.1　受け身の「れる」「られる」

例文
⑮(1) 部長が サバを 食べ　　た。
⑮(2) サバが 部長に 食べ られ た。

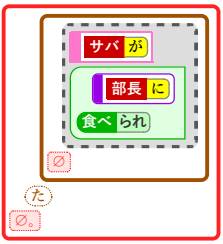
どちらも［部長＝食べる側］［サバ＝食べられる側］ですが、その事態を見る角度が(1)と(2)とで正反対になっています。(2)は「受け身」と呼ばれ、接尾語（せつびご） れる / られる を動詞（の未然形）の後ろに付けて表します。なお、英文法では「受動態」と呼ばれることが多く、対する(1)は「能動態」と呼ばれます。

図にすると次のようになるでしょう。

⑮(1) 元の文



⑮(2) 受け身の文



特に大事なのは、

・部長 と サバ の位置が入れ替わっている（助詞 も変わっている）
・受け身の文では 動詞 の後ろに られ が付いて新たな動詞を作っている

の 2 点です。一方で、全体構造の方はほとんど同じであることがわかります。

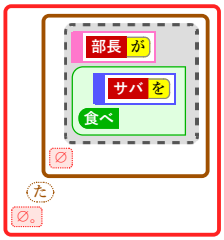
0.6.2　使役の「せる」「させる」

例文
⑮(1) 部長が　　サバを 食べ　　た。
⑮(3) 社長が 部長に サバを 食べ させ た。

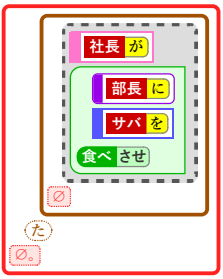
どちらも［部長＝食べる側］［サバ＝食べられる側］ですが、(3)では新たに社長が登場します。そしてこの社長が部長に「サバを食べなさい」と命令し、部長はそのとおりにするわけです。このようなものは「使役（しえき）」と呼ばれ、接尾語 せる / させる を動詞（の未然形）の後ろに付けて表します。

これも図にしてみましょう。

⑮(1) 元の文



⑮(3) 使役の文



右側の使役の文で特に大事なのは、

- 社長 が 主語 の位置に入っている
- 動詞 の前に 部長 に がある
- 動詞 の後ろに させ が付いて新たな動詞を作っている

の 3 点です。

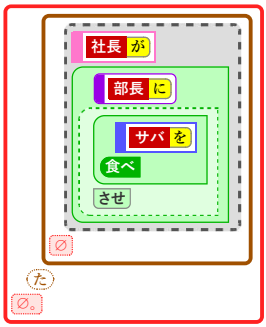
※使役の場合その相手（この例では部長）の存在は必須だと考え、部長に のデザインを濃いめにしてあります。受け身のときの 部長に は必須とまでは言えないと考えて薄いままになっています。

ところで、使役を表す させ(る) は 食べ(る) に付加されているように見えますが、社長が部長にやらせたのは単なる 食べ(る) ではなく サバを 食べ(る) というカタマリであるはずです。このとき、サバを と 食べ(る) の間には 動詞 を「主」とした主従関係があって、カタマリ全体としては動詞的なものになっています。

次に、サバを 食べ(る) と させ(る) とを組み合わせるわけですが、その結果生じる サバを 食べ させ(る) というカタマリもまた動詞的なものです。そのため させ(る) の品詞がカタマリ全体の品詞と一致しています。

以上をまとめると、次のような図になります。

⑮(3) 使役の文・修正版



サバを 食べ(る) のようなもの、つまり 動詞 を中心として構成された動詞的なカタマリのことを本書では 動詞語群 と呼ぶことにします。名詞 形容詞 副詞 を中心としたものについても同様に 名詞語群 形容詞語群 副詞語群 と呼びます。

一方、食べ させる のようなつながりについてはこれを修飾と見る学説もありますが、通常の修飾とはかなり違った姿をしていることも事実です。そこで本書では、「接尾語は**品詞を変更するのに使われる特別な語**であって、そこに修飾のような**主従関係**はない」と考え、食べ させる のようカタマリを 動詞相当語句 と呼ぶことにします。名詞相当語句、形容詞相当語句 および 副詞相当語句 についても同様です。

※つまり、
　語　　群（実線枠）：修飾関係など、中心となる語が品詞を決めているもの
　相当語句（点線枠）：そうではないもの
ということになります。もっとも、どちらと考えても実用上の問題は生じません。

なお、「急いで書かせる」のような言い方では、次の２種類が区別できます。

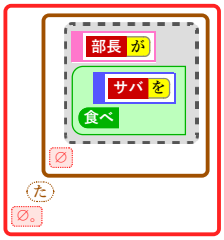
・「書かせる」ことを急ぐ場合　　急いで 書か せる
・「急いで書く」ことをさせる場合　　急いで 書か せる

0.6.3　受け身と使役を組み合わせる

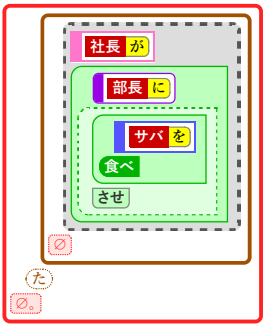
例文
⑮(1) 部長が　サバを 食べ　た。
⑮(4) 部長が 社長に サバを 食べ させ られ た。

(4)も同じ要領です。(1)元の文 → (3)使役のみ → (4)受け身を追加 という流れを見やすくするため、３つ並べてみましょう。

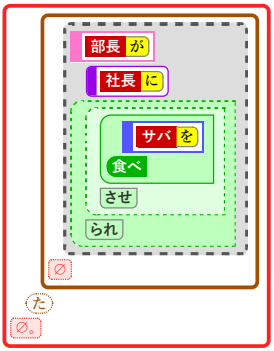
⑮(1) 元の文



⑮(3) 使役の文・修正版



⑮(4) 使役の受け身の文



３つの図を見比べながら、接尾語 を付加するときのしくみをよく観察してください。たとえば、サバを 食べ というカタマリがずっと維持されているところなどは特に興味深いのではないでしょうか。

ここでは実例として**受け身**を表す れる / られる と**使役**を表す せる / させる だけを紹介しましたが、れる / られる については**自発**・**可能**・**尊敬**を表すものにも同様のことが成り立ちますし、それら以外にも接尾語とされるものがいくつか存在します（次の たい もそうです）。

0.6.4 「水が飲みたい」（品詞を変える接尾語）

例文
⑰(1) 今朝は 水が 冷たい。
⑰(2)　私は 水が 欲しい。
⑰(3)　私は 水が 飲み たい。
⑰(4)　私は 水を 飲み たい。

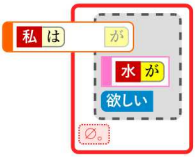
たたき台の図

とりあえず図にしてみましょう。

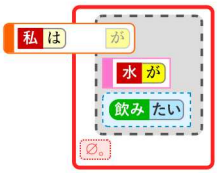
⑰(1)「今朝は水が冷たい」



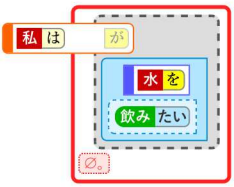
⑰(2)「私は水が欲しい」



⑰(3)「私は水が飲みたい」



⑰(4)「私は水を飲みたい」



これらのうち(1)については単純な形容詞文ということで問題ないでしょう。冷たい は 水 の **属性ないし状況**ですから。

※(1)の「今朝は」という部分ですが、主題 にする前の 今朝 ∅ は時を表す 副詞的修飾語 です。⑨で登場した「今回は」も 副詞的修飾語 を**主題化**したものです。

疑問が残る部分

問題は(2)(3)および(4)です。上の図を見て思うのは、欲しい や 飲み たい は**発信者か誰かの願望**を表すものであって 水 **の属性や状況**を表すものではないだろうということです。それどころか、水 は 欲する や 飲む **の対象物**であるとすら言えます。実際、時枝はこの場合の 水 は 主語 ではなく「対象語」と呼ぶべきものであると主張しましたし、現在でもこの種のものを 目的語 である（にもかかわらず**格助詞** が を伴っている）と考える説が有力です。

認識という段階を重視する

しかし、言語であれ音楽であれ 表現 と**直接**つながっているのは 発信者の認識 であって、認識

のもとになっている 対象 が 表現 と**直接**つながっているわけでは**ありません**。本章冒頭の小見出しにもあるようにあくまでも

> **対象－認識－表現**

というつながりになっているのです。**このつながり方は表現について考えるときの基本中の基本**ですから、文構造 について考えるときにもそれを 対象の構造 と**迂闊に直結しないよう**気を付ける必要があります。

ならば、どのように考えるべきなのでしょうか？　たしかに**現実の世界**においては 水 は 欲する や 飲む の**対象物**であるという関係があるのですが、**発信者の頭の中**では 欲しい や 飲み たい も 水 の**属性**である**かのように短絡的に**扱っているのだというところにポイントがあります。つまり、**食い違い**が生じているのは 対象の構造 と 認識の構造 **との間**なのです。もちろんこのような短絡的取り扱いが行われるのは、それなりの**有用性・利便性**があってのことでしょう。それに対して、文構造 はそういった 認識の構造 を**素直に反映しているだけ**でしかありません。ゆえに、**(2)**「私は水が欲しい。」も**(3)**「私は水が飲みたい。」も**形容詞文**である（ただし**(1)**とは構造が少し異なる）ということになります。

※以上の議論について三浦つとむを参照しました。

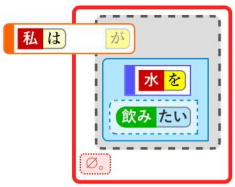
※飲む という行為の対象物であるはずの 水 に が が付けられるのは、「水 を 主語 として扱いたい」という意思を発信者が持っているからだ、と言うこともできます。

※同様のことは、**可能**を表す 水 が 飲める にも言えます。ここでも 水 は 飲む の**対象物**ですが、が は 水 が 主語 であることを表しています。**受け身**の 水 が 飲まれる については言うまでもありません。

１文字の違いにあらず

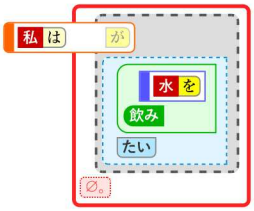
残る**(4)**ですが、冒頭では

> **⑰(4)「私は水を飲みたい」**



と表していました。この図では、願望を表す たい は 飲み と結合しているように見えますが、もしそうだとすると 飲み たい という**形容詞**が 水を という**目的語**を伴っていることになります。それはおかしいということでもう一度考えてみると、願望の内容は単なる 飲む ではなく 水を 飲む というカタマリであるという事実に気が付きます。そこで図を次のように修正します。

⑰(4) 改訂版



つまり、水を は 飲み に係っていて、その 水を 飲み というカタマリに たい が付いて 形容詞相当語句 化しているわけです。

以上のように、「飲みたい」については「水**が**飲みたい」「水**を**飲みたい」という２つの言い方が可能です。これは 飲む が**目的語を持つ動詞**であることによるものですが、たった１文字（が / を）の違いのように見えながら実は**構造も違っている**のだという点が大切です。

0.6.5　完了の「た」「ている」

口語の「た」は何を意味しているか

先に**過去**を表す（た）を扱いましたが、「**た**」については「**完了**も表す」あるいは「**完了**だけを表す」という説もあります。そこでこんなことを考えてみました。

文語では「**たり**」は**完了**を、「**き**」「**けり**」は**過去**を表したようですが、このうち「**たり**」は**口語**では「**た**」となり、「**き**」「**けり**」は消滅しました。問題は、残された「**た**」が何を表しているかです。

以下ではそれらの語を単独で見るだけでなく、**否定**と組み合わせた場合についても一緒に考えてみましょう。すると、**文語**・**口語**それぞれについて

＼	肯定表現　（由　来）	否定表現　（由　来）	順　序
文語	「書きたり」（＝て＋あり）	「書きたらず」（＝て　＋あら＋ず　）	否定語が後
	「書きき」	「書かざりき」（＝ず　＋あり＋き　）	否定語が前
口語	「書いている」（＝て＋いる）	「書いていない」（＝て　＋い　＋ない）	否定語が後
	「書いた」	「書かなかった」（＝なく＋あっ＋た　）	否定語が前

※「**けり**」は「**き**」と同じ構図なので図表内では省略。

のようになります。これらを「**否定**語が置かれる位置」（表の右端）で分けてみると

順　序		肯定表現　（由　来）	否定表現　（由　来）
否定語が前	文語	「書きき」	「書かざりき」（＝ず　＋あり＋き　）
	口語	「書いた」	「書かなかった」（＝なく＋あっ＋た　）
否定語が後	文語	「書きたり」（＝て＋あり）	「書きたらず」（＝て　＋あら＋ず　）
	口語	「書いている」（＝て＋いる）	「書いていない」（＝て　＋い　＋ない）

となりますが、それぞれについて**文語**と**口語**とが意味的にも（ほぼ）対応していることがわかります。そこから、

意味		肯定表現　（由　来）	否定表現　（由　来）	否定の位置
過去	文語	「書きき」	「書かざりき」（＝ず　＋あり＋き　）	否定の過去
	口語	「書いた」	「書かなかった」（＝なく＋あっ＋た　）	
完了	文語	「書きたり」（＝て＋あり）	「書きたらず」（＝て　＋あら＋ず　）	完了の否定
	口語 (1)	「書いている」（＝て＋いる）	「書いていない」（＝て　＋い　＋ない）	
	口語 (2)	「書いた」※	（なし）	（なし）

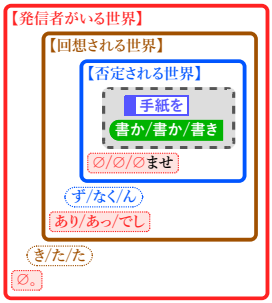
※「**た**」は「**たり**」の連体形「**たる**」に由来するという経緯を考慮して、口語に **(2)** を追加した。

のようにまとめることができそうです。

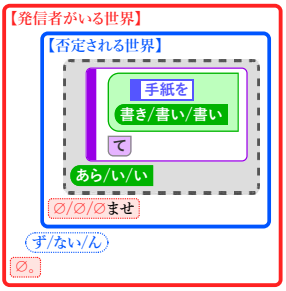
図を用いてさらに探る

次に、**否定の過去**および**完了の否定**について**敬体**も含めて図解すると、次のような違いがあることが見えてきます。

否定の過去
文語「∅　＋**ず**　＋**あり**＋**き**＋∅」
常体「∅　＋**なく**＋**あっ**＋**た**＋∅」
敬体「∅**ませ**＋**ん**　＋**でし**＋**た**＋∅」



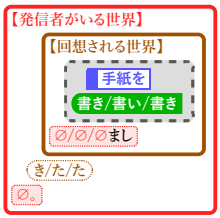
完了の否定
文語「**て**＋**あら**＋∅　＋**ず**　＋∅」
常体「**て**＋**い**　＋∅　＋**ない**＋∅」
敬体「**て**＋**い**　＋∅**ませ**＋**ん**　＋∅」



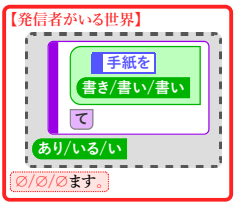
（なし）

そして、それぞれから**否定**を取り除くと次のようになるでしょう。

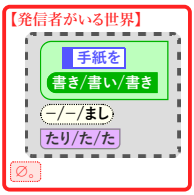
過去のみ
文語「∅　＋**き**＋∅」
常体「∅　＋**た**＋∅」
敬体「∅**まし**＋**た**＋∅」



完了のみ (1)
文語「**て**＋**あり**＋∅　」
常体「**て**＋**いる**＋∅　」
敬体「**て**＋**い**　＋∅**ます**」



完了のみ (2)
文語「　＋**たり**＋∅」
常体「　＋**た**　＋∅」
敬体「**まし**＋**た**　＋∅」



肝心の**口語**「**た**」ですが、左端の図を見ると**文語**「**き**」と同様に**過去**を表しています。

一方、右端の図を見ると、「**た**」は「**たり**」と同様に**完了**を表しています。「**た**」が源流の「**たり**」に似た働きをするのは当然のように見えるかもしれませんが、**否定**と結び付いたかたちではなぜか使われません（上段右端の空白部分）。

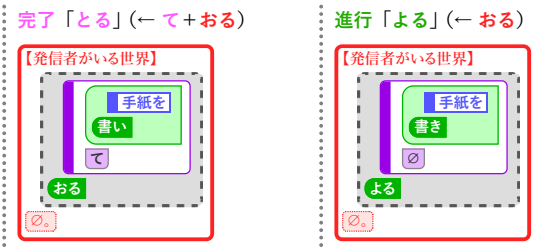
ところで、単独の**完了**「**た**」を**敬体**にすると、**過去**「**た**」の場合と同様に「**ました**」と表現されます。しかし、**完了**「**た**」が **事象部** 内にあるらしい※ことから考えて、この「**まし**」には肯定判断は伴っていないと思われますので、構造図もそのようにしてあります。

※『国語学大辞典』(国語学会編、1980) p.208の「完了表現」の項には、「…口語の『た』は文語『たり』の連体形『たる』に遡る。助動詞相互間の承接順序からいっても、**完了の助動詞は、用言的接尾語**（使役・受身・希望）**と助動詞との中間に位置する**」と書かれています。

0.6.6　進行の「ている」

完了を表すものとして紹介した「ている」ですが、**進行**を表すこともあります。しかし、構造的な違いをどう考えるかは微妙です。

共通語の「ている」は**完了**も**進行**も同じ構造だと考えることもできるでしょう。ところが、中国・四国・九州北部あたりでは**完了**と**進行**とで違った言い方（たとえば広島などではそれぞれ「書い**とる**」「書き**よる**」）が使われることがあります。そこで参考までに、この場合の構造を図示してみましょう。



両者の違いは、**て** **おる** と **∅** **よる** の部分です。そして共通語などにおいては**進行**の場合にも **て** が使われるわけです。

※共通語のように双方に「ている」を使用する場合でも、**もう** や **今** などを付けることによって**完了**か**進行**かが識別しやすくなります。

蛇足ですが、**れる** / **られる** / **せる** / **させる** / **たい** および **た** は、学校文法では**助動詞**とされていますが、構造図からも明らかなように既存の**客体的表現**（ここでは **動詞**）から新たな**客体的表現**を派生させるために使われるものですから、本書では**接尾語**であると考えます。時枝や三浦もそのように分類しています。

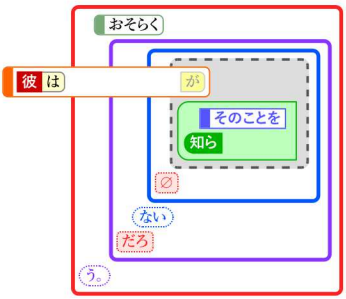
0.7　意味的関係と語順との両立

0.7.1　意味的関係を維持したまま語順を変える場合

例文
⑱(1) おそらく　彼は そのことを　　知ら ない だろ う。
⑱(2) そのことを　　おそらく　彼は 知ら ない だろ う。

(1)は⑭(0)に「おそらく」と「だろう」を付けたものです。普通に図式化すると次のようになるでしょう。

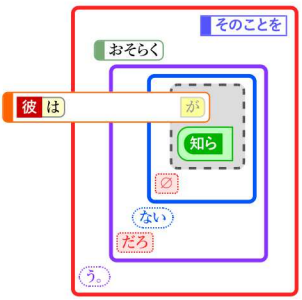
⑱(1)



※ここでは そのことを 知ら をまとめて そのことを 知ら としてある。

さて、言いたい内容は同じでも、**目的語** そのことを を前に出して(2)のように言うことも可能です。そこで図の そのことを を安直に最上段まで動かすと

⑱(2) 試案

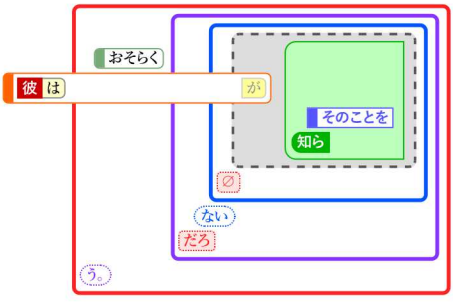


← 目的語がこんなところにきてしまう

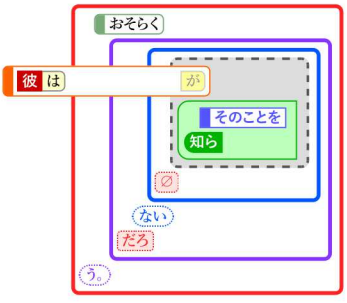
のようになりますが、この書き方では(1)に含まれていた**意味的関係**が崩れてしまいます。もしかするとここで「うまく図式化できないのはその文が間違ったものだからではないか」と考える人が出てくるかもしれませんが、文(2)は現実に許されている言い方なのですから、否定的な結論を避ける方法を考えなくてはなりません。

さてどうするかですが、**大きな字下げを使って配置を変更する**ことがカギになります。

⑱(1) 字下げにより配置を変更したもの

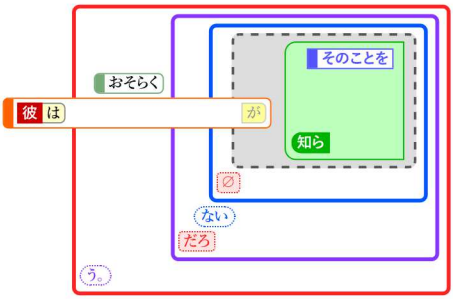


再掲）最初の図



最初の図（上図右側に再掲）と比較すると、配置は変わっていても**意味的関係（囲みの包含関係）は変わっていない**ことがわかるでしょう。これをもとにして語順変更を考えると、(2)の構造は次のように表すことができます。

⑱(2) 目的語を前に出した場合



これをすぐ上の(1)と比べてみると、**語順を変更しても意味的関係は維持されている**ことがわかりますし、実際に口に出してみても特に難しさを感じることはなく、「**人間にはこの程度の柔軟性はある**のだな」と実感できます（これには訓練の結果という面もあります）。つまり、「うまく図式化できないのはその文が間違ったものだからだ」という本末転倒な考え方を、**図の表現力を高める**ことによって克服できたわけです。

なお、彼は / そのことを / おそらく の順序は変更できますが、知ら ∅ ない だろ う はひとつながりになっていて、順序は固定的ですし、他の語句を挟むこともできません。

※実は助動詞の間に他の語句を挟んだかたちの図を書くことも可能なのですが、だからと言ってそこから「うまく図式化できるのだからこの文構造は正しい」と結論付けるわけにはいきません。文構造が持っている**すべての性質**が図式化方法に**過不足なく**反映されているのでないかぎり、**「図式化できるかどうか」と「文構造が合理的かどうか」との間に完全な一致は期待できない**からです。その意味で**文構造の図式化は構造説明の手段**ではあってもルールの必然性を証明できるようなものではなく、**「文構造が合理的かどうか」は実際の使われ方（時代や地域などによる違いも含む）をベースに判断する**ことが必要です。このことは、他のさまざまな種類の図式に関しても言えることでしょう。

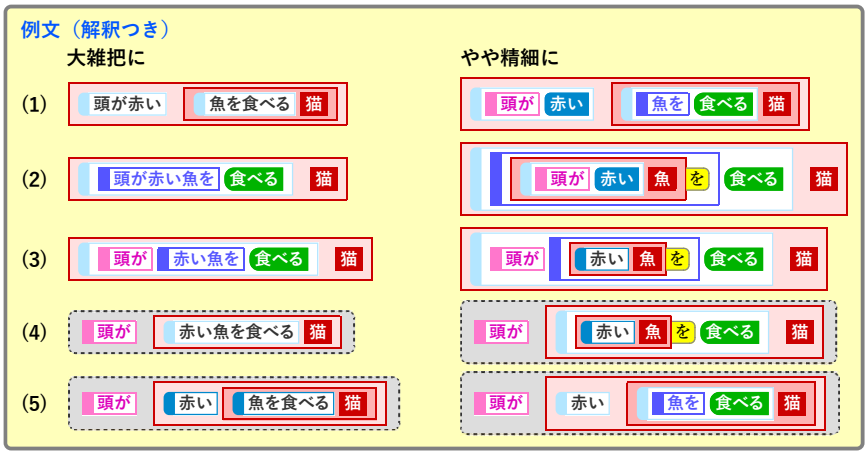
0.7.2　語順は同じなのに意味的関係が異なる場合

例文
⑲ 頭が赤い魚を食べる猫

これは少し前にツイッターで話題になったものです。そこでは５つの解釈が紹介されていましたので、それらを構造図で表してみましょう。いろいろなテーマを復習できる素材でもありますので、面倒くさがらずに文の構造をたどってみてください。

※出典：https://twitter.com/nakamurakihiro/status/1230798247989366784　（中村明裕氏）

ツイートで紹介されている５つの解釈はだいたい次のように表すことができます。



※これら以外にもあるという意見も見かけましたが、ここでは割愛します。

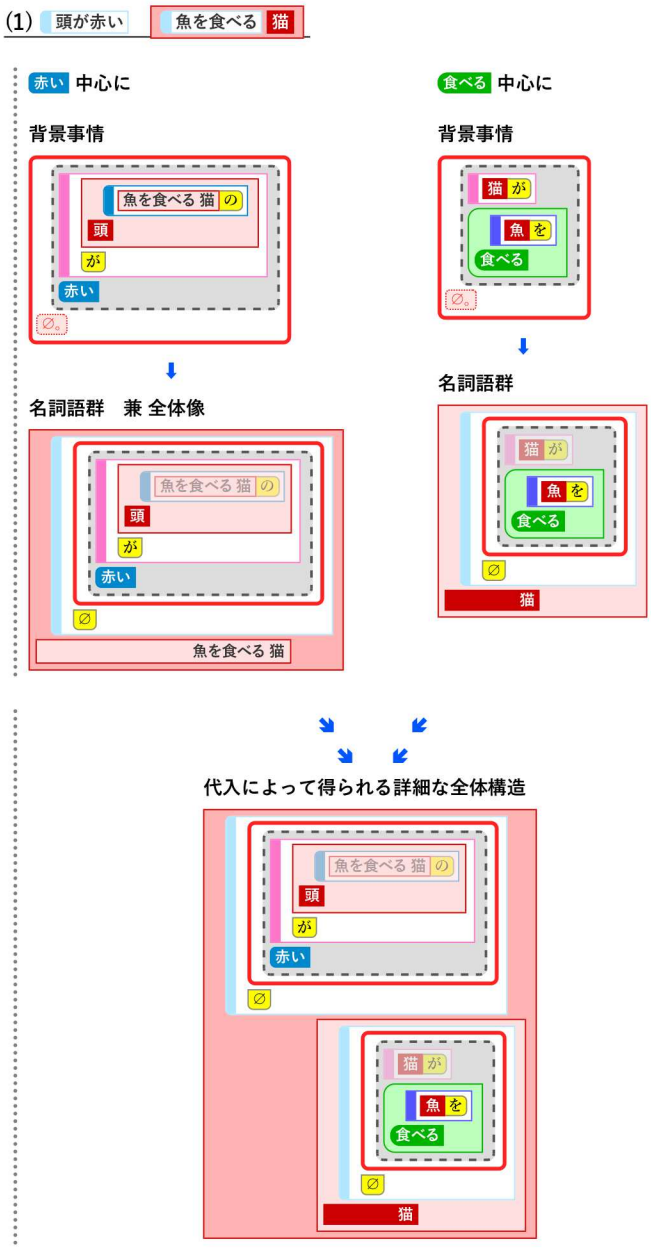
※文中に登場する「頭」は、**(1)(3)**では猫の頭、**(2)**では魚の頭であるのに対し、**(4)(5)**ではどちらでもありません。

※**(1)(2)(3)**は単なる 名詞語群 なので全体を「最近話題の」のような 形容詞的修飾語 で修飾することができますが、**(4)(5)**の 主語＋名詞語群 にはそれができません（すぐ外側に置けるのは 肯定判断 だけです）。その違いを明確にするため、**(4)(5)**は 事象部 の枠で囲んでいます。

５つの解釈それぞれについて、以下の手順で分析します。

基礎情報	赤い と 食べる について**修飾関係**や**背景事情**を明確にする
関係節化	そのうち**背景事情**を 関係節 名詞 にする
全体像	必要に応じて**文の全体像**（**主語述語**の関係）を補う
代入	残っている 名詞語群 に、対応する 関係節 名詞 を**代入**する

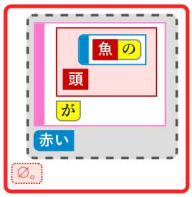
以下、一つひとつ見ていきましょう（図のみを掲載します）。


(1) 頭が赤い 魚を食べる 猫
赤い 中心に
背景事情
魚を食べる 猫 の
頭
が
赤い
∅。
名詞語群　兼 全体像
魚を食べる 猫
食べる 中心に
背景事情
猫 が
魚 を
食べる
名詞語群
猫
代入によって得られる詳細な全体構造

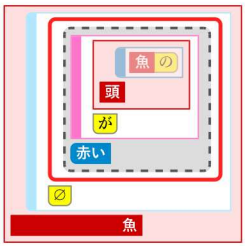
(2) 頭が赤い魚を 食べる 猫

赤い 中心に

背景事情

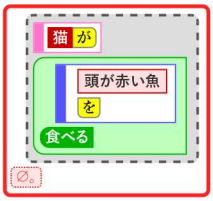


名詞語群

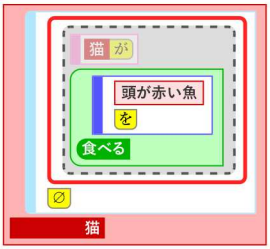


食べる 中心に

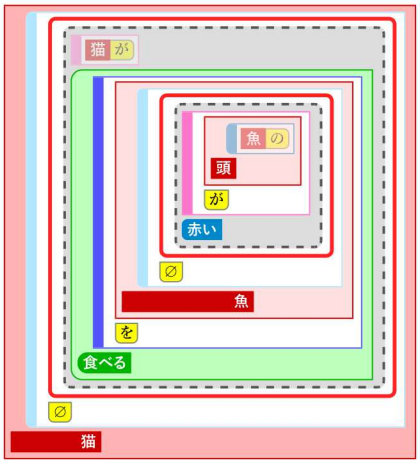
背景事情



名詞語群　兼 全体像



代入によって得られる詳細な全体構造



(3) 頭が 赤い魚を 食べる 猫

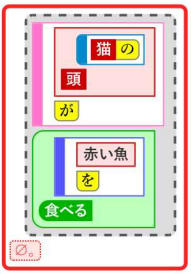
赤い 中心に

修飾関係

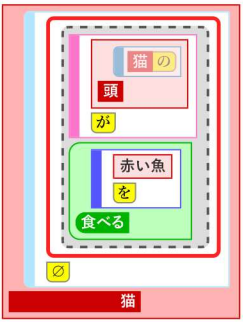


食べる 中心に

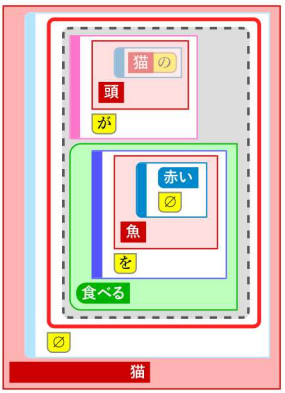
背景事情



名詞語群　兼 全体像



代入によって得られる詳細な全体構造



(4) 頭が 赤い魚を食べる 猫

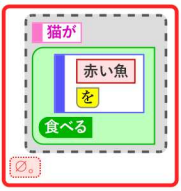
赤い 中心に

修飾関係

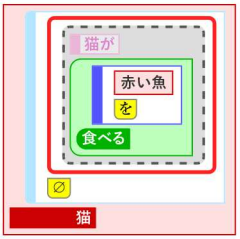


食べる 中心に

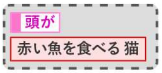
背景事情



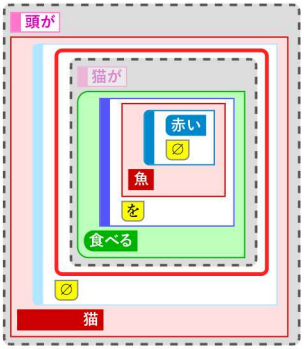
名詞語群

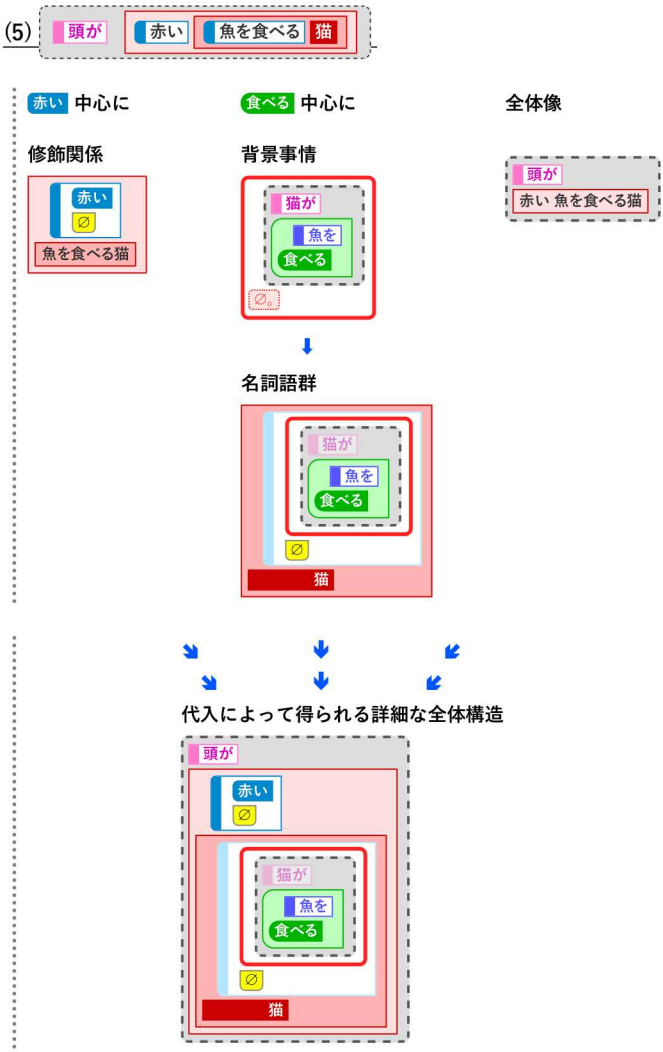


全体像



代入によって得られる詳細な全体構造




(5)
頭が
赤い
魚を食べる
猫
赤い 中心に
修飾関係
赤い
∅
魚を食べる猫
食べる 中心に
背景事情
猫が
魚を
食べる
∅
名詞語群
猫が
魚を
食べる
∅
猫
全体像
頭が
赤い 魚を食べる猫
代入によって得られる詳細な全体構造
頭が
赤い
∅
猫が
魚を
食べる
∅
猫

0.7.3　表示方法のバリエーション

インライン表示とコンパクト表示

ここまでに何度も登場している

（大雑把に）



（やや精細に）



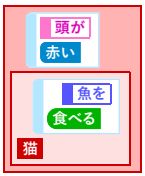
のようなものを「**インライン表示**」と呼びます。１次元表示であるため「**架橋**」は表現できませんが、**本文中に組み込んで使える**点が便利です。

一方、精細な構造を表すのに適しているのが「**ブロック表示**」です（具体例は省略）。これは、タテ方向の配置を活用することで**緻密さと明快さとを両立**させようとするものです。

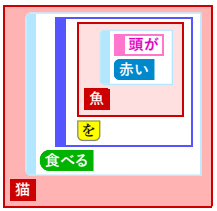
ところで、ブロック表示をベースにしていても、インライン表示を**併用**することは可能です。また、ブロック表示であれインライン表示であれ、**言語として表現されない部分**（薄く表示している部分やゼロ記号など）を**省略**したり、**カタマリ**を細かく区切らず**大きなまま**残したりすることも許されます。具体例としては、先の５つの構造図をブロック表示のまま下記のように簡略化してもよいわけです。この手法には、**簡略化によって厳密さが弱まる**という短所があるものの、**直感的にわかりやすくなり**、**スペースの節約にもなる**という長所があります。このようなものを「**コンパクト表示**」と呼ぶことにしましょう。

コンパクト表示

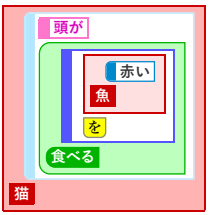
⑲(1)



⑲(2)



⑲(3)



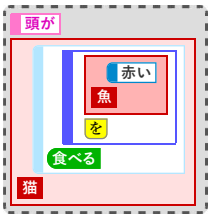
あるいは



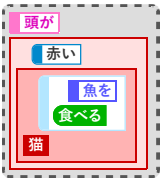
など適宜。

※(2)～(5)も同様。

⑲(4)

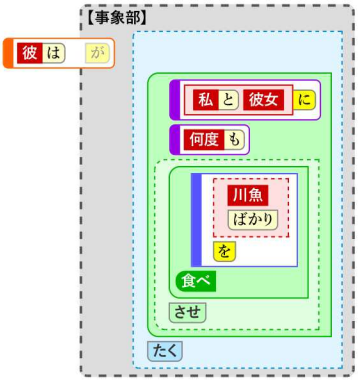


⑲(5)

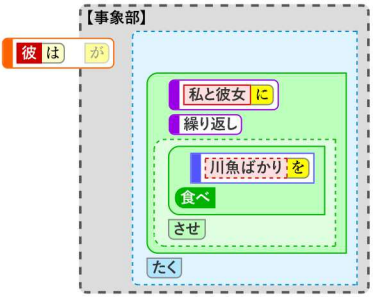


当然のことながら、先の図の**事象部**にも**コンパクト表示**が活用できます。この場合も、厳密さを落とすことで見やすくなるようです。

厳密な書き方



コンパクト表示



縦割り表示

ところで、もうひとつ特殊な表示方法があります。まず、

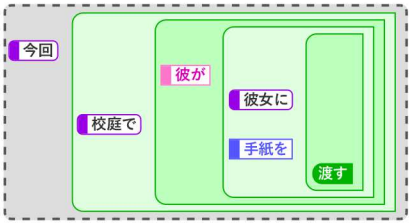
⑨の事象部（少し変更）



※ 今回 の後の は は削除した。

を見てください。これは既出の図を少し変更したものですが、**語句間の意味的関係**をよく検討してみると、今回 が係っている相手は 渡す という動詞だけではなく**残りの語句全体**だと考えられますし、その内部についても同様の構造が見て取れます。つまり、**複数階層の入れ子構造**が存在していると考えられるわけです。その点を考慮して図を書き直すと

縦割り表示の図

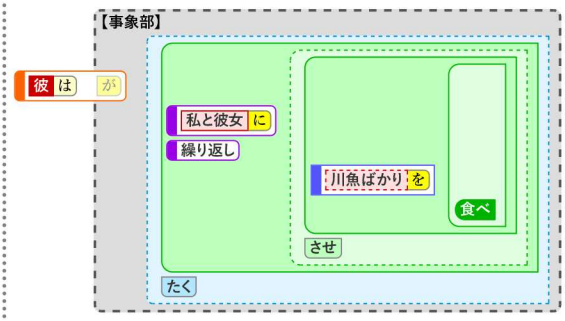


のように表すことができます。これを**縦割り表示**と呼びます。

この書き方には**横幅が大きくなる**という短所がありますが、**語句間の意味的関係を変えずに語**

順を入れ替えることができるという長所もあります。そのため、日本語のように修飾語句の順序が比較的自由である言語にはもちろんのこと、英語のように疑問文などにおいて疑問詞や助動詞などが主語の前に置かれる言語にも、柔軟に対応することができます。

少し前に出てきた例についても同様に処理してみましょう。

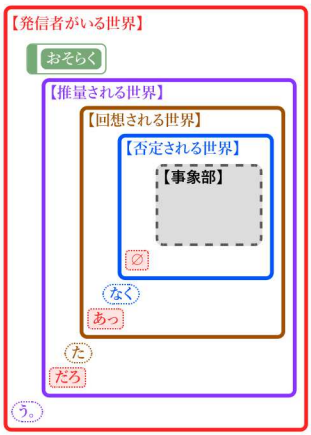


この図を先の**コンパクト表示**と比較して、**囲みの包含関係（語句間の意味的関係）**が維持されていることを確認してください。

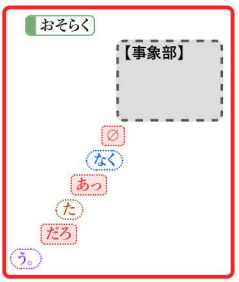
判断部の表示方法

ところで、**判断部**に関しては、そこに**世界の入れ子**があることを重視して一つひとつの世界に対応した囲みを表示してきましたが、このしくみが正確に理解できてさえいれば、下右図のように簡略化した書き方をしてもかまいません。もちろんこれは正しい理解があればこその簡略化です。なお、英文の場合には、**判断部の構造が日本語の場合ほど明確ではない**こともあってこの方法が活躍します。

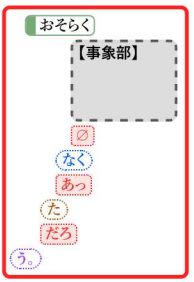
厳密な書き方



簡略化した書き方①



同②



0.8　まとめ

0.8.1　和文の基本構造

ここまでに学んできた内容（+α）について整理しましょう。

客体的表現と主体的表現

最も基本的なこととして、文に含まれている表現には**客体的表現**と**主体的表現**とが区別できます。

まず、**客体的表現**というのは、発信者が 対象 を 概念 としてとらえて 表現 したものです。具体的な語は無数にありますが、**品詞**としては大きく 名詞 / 形容詞 / 動詞 / 副詞 に分けることができます。

※本書では、これらを「**4 大品詞**」と呼びます。

通常、名詞 / 形容詞 / 動詞 のいずれかの**語**を中心として 事象部 が構成されます。その中心となっている**語**のことを「**述語**」と呼びます。事象部 で表現されている内容は「**事象**（じしょう）」と呼ぶことができます。

※形容詞 の一部（**連体詞**）および 副詞 のすべては**修飾語**としてのみ使われますので、**述語にはなりません**。

一方、**主体的表現**というのは、発信者が持っている 主観的な感情や意志そのもの を、客体 として扱うことなく直接に 表現 したものです。その中心を成すのは**品詞**としては 助詞 と 助動詞 の 2 種類で、それぞれに属する具体的な語の数も比較的限られています。

※ただし、意味や使い方はやや複雑です。

このうち 助詞 は 名詞 などと結合して意味を付け加えます。特に 格助詞 は相手に**格を付与**※します。

※**格を付与するのは発信者（の認識）**であって、格助詞 はそのことを表すために使われるにすぎません。にもかかわらず、この種の擬人的な表現は頻繁に使われます。

また、助動詞 は 事象部 の内容に対する発信者の認識（判断）を表します（事象部 の外に置かれます）。

このような区別がありますので、一つひとつの文は**事象部**と**判断部**から成ると考えることができます。

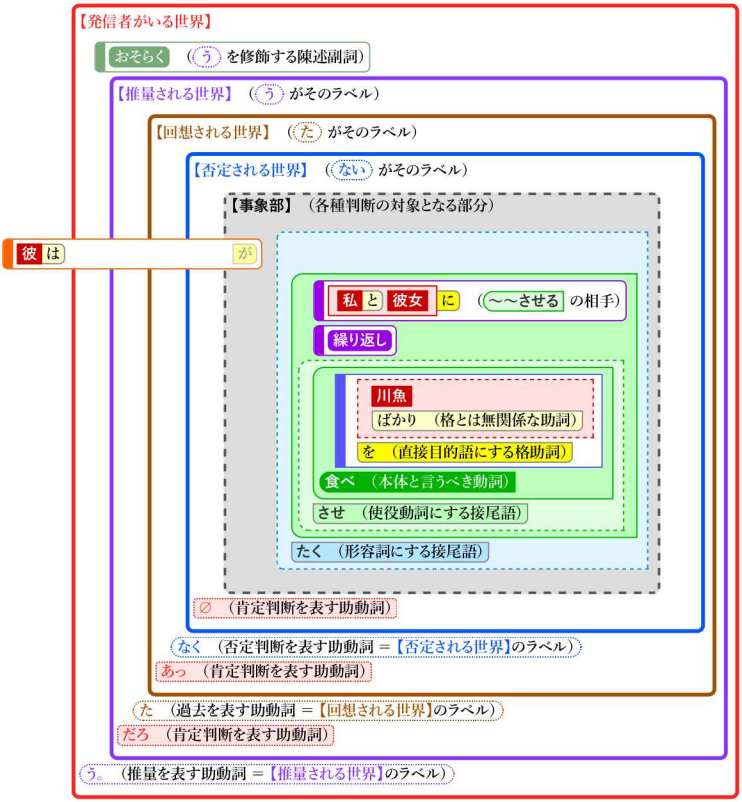
なお、客体的表現であれ主体的表現であれ、**存在しているはずなのに表現されていない認識**は**ゼロ記号**「∅」で示します。

文は事象部と判断部とからなる

私が考える和文の構造図

「おそらく彼は私と彼女に何度も川魚ばかりを食べさせたくなかっただろう。」

（**原文の語順を完全に維持しながら入れ子状の意味的関係を表示している。**）



図の内部にある 事象部 は文字通り**事象**を表す部分であり、**文の中核**とも言えます。

その中心は**述語**です。基本的な**述語**は 名詞 / 形容詞 / 動詞 のいずれかであり、日本語では 事象部 の（ほぼ）**最後**に置かれます。

この 事象部 を取り囲むかたちで存在しているのが**判断部**で、そこにある 助動詞 たちは、**各「世界」の種類を示すラベル**として働いています。

※ラベルとして働いているのは 名詞語群 に付く 格助詞 なども同様ですが、これらには 世界 の間に見られるような観念的移動がありませんので、名詞語群＋格助詞 は外見どおりにまとめて 主語 や 目的語 などとして扱っています。

0.8.2　日本語の品詞

学校文法では、**品詞**として**名詞**(、**代名詞**)、**副詞**、**連体詞**、**接続詞**、**感動詞**、**動詞**、**形容詞**、**形容動詞**、**助詞**、**助動詞**があるとされ、分類表も教えられます。ここでは本書の解説方法に合わせて分類しなおしたものを紹介します（三浦も参照しました)。

客体的表現（4 大品詞）

名詞（実体を表す）

「名詞」	学生、東大、夕食、数学、英語、おいしさ、重み、動き
「代名詞」	彼、私、お前、誰、これ、どれ、何、そいつ、あっち、どちら

動詞（動的属性を表す）

活用するもの	働く、学ぶ、笑う、持つ、寒がる、読む、言う

形容詞（静的属性を表す）

活用するもの	若い、大きい、美しい、やさしい、ひどい、欲しい ※学校文法などでは、このグループだけを「**形容詞**」と呼ぶ
活用しないもの①	好き、嫌い、元気、まじめ、頑丈、ハード、グロテスク ※学校文法などでは、これら＋だ を 1 語とし、「**形容動詞**」と呼ぶ
〃　〃　〃　②	大きな、あらゆる、たいした、いかなる ※実体に属性を付加する**修飾語**としてのみ使われ、「**連体詞**」と呼ばれる

副詞（属性に属性を付加する）

活用するもの	※なし
活用しないもの	やがて、ふと、かなり、すぐ、そう、ゆっくり、ときどき、たくさん ※**修飾語**としてのみ使われる

主体的表現

助詞	が、で、に、を、は、から、まで	
助動詞	ある、だ、です、ない、ぬ、た、う	※**判断部**で使われる
陳述副詞	おそらく、きっと、たぶん、決して、まるで	※**修飾語**としてのみ使われる
接続詞	そして、だから、しかし、および、あるいは、すると、つまり	
感動詞	おや、あら、はい、おい、もしもし	

※英和辞典や英単語集を見ると、英語の **副詞** に対して「すぐ」「素早く」「後で」「絶えず」といった訳語が付いています。これらのうち「すぐ」は **副詞** ですが、「素早く」以下は**語**としての **副詞** ではなく **副詞相当語句** です。このようなことが起きるのは、訳語というのがあくまでも「同じような意味を日本語で表すとこうなる」というものだからです。

※同様のことは英語の **形容詞** に対する「古い」「茶色の」「道に迷った」「害を与える」といった訳語についても言えます。これらのうち「古い」は **形容詞** ですが、「茶色の」以下は**語**としての **形容詞** ではなく **形容詞相当語句** ですし、それらの多くはむしろ **形容詞的修飾語** である（修飾対象の **名詞** が存在している）かのような言い回しになっています。少しややこしいですが、混乱しないようにしましょう。

0.8.3　カタマリの種類

正確に意思疎通するには、各種の**カタマリ**についてよく知っておくことが必要です。そこで、**カタマリの種類**について整理しておきましょう。

品詞類（**名詞類** / **動詞類** / **形容詞類** / **副詞類**）

語（名詞 / 動詞 / 形容詞 / 副詞 ＝ **4 大品詞**）

語群（名詞語群 / 動詞語群 / 形容詞語群 / 副詞語群）　※「**内心構造**」と呼ぶ

等位接続で作る　＝第 1 の方法　※「**等位的な内心構造**」と呼ぶ
係り受けで作る　＝第 2 の方法　※「**従属的な内心構造**」と呼ぶ
修飾関係
主述関係

相当語句（名詞相当語句 / 動詞相当語句 / 形容詞相当語句 / 副詞相当語句）　※「**外心構造**」と呼ぶ
品詞変更で作る　＝第 3 の方法
助詞による品詞変更
接尾語による品詞変更

※**語群**と**相当語句**とを区別しない場合は、総称として「**○詞的なカタマリ**」と呼ぶ。

事象部　構造：**述語**単体、あるいは**係り要素**が係ったもの
和文では、主語 の存在は必須ではないが、存在すると 事象部 を構成する
補足：**事象**を表し、肯定判断 の対象となる

判断部　構造：事象部 に対するもの（外側に配置された**主体的表現**）

格なし節　種類：発信者がいる世界
構造：事象部 ＋ **判断部**

係り要素　性質：**格**を持ち、**品詞類**に係る

格は既定　種類：連体詞 / 副詞 / 副詞語群 / 副詞相当語句
構造：品詞類のまま

格は任意　種類：主語 / 目的語 / 形容詞的修飾語、関係節 などの**格あり節**
構造：格が既定でない**品詞類**や**格なし節** に 格助詞（∅も可）が付いたもの

0.8.4　品詞類（4大品詞の語・語群・相当語句）

前項では**語群**（名 形 動 副）と**相当語句**（名 形 動 副）についていくつかの**作り方**があることに触れましたが、以下ではもう少し詳しく説明しましょう。

第1の方法は、私 および 彼 のように同じタイプの要素（語句だけでなく節同士も）を**接続詞**によって**並列させる**もので、「**等位接続**」と言います（この用語はこれが初登場です）。これによりできるカタマリは「**語群**」（名 形 動 副）です（節同士の場合は除きます）。

第2の方法は、**語**（名 形 動 副）や**語群**（名 形 動 副）に各種の**係り要素**を**係らせる**ものです。係らせ方（**係り受け関係**）は次のように決まっています。これらによりできるカタマリも「**語群**」（名 形 動 副）です。

修飾関係

- 形容詞的修飾語 / 同格節 / 関係節 が 名 名 に係る
- 必須の副詞的修飾語 / 任意の副詞的修飾語 が 動 動、形 形、副 副 に係る
- 目的語 が 動 動 に係る

※このタイプの場合、**新たなカタマリの品詞**は**中心となる語が持つ品詞**と**同じ**であり、その意味で、元の語が「**主**」、付加される係り要素が「**従**」であると言える。そこで、その**主従関係**を明確にするため、**係り要素の方を右に1文字ずらして配置**することを原則としている。

主述関係

- 主語 が 名 名、動 動、形 形 に係る

※修飾関係との区別は微妙だが、主語 の場合は対応する品詞類とともに 事象部 の軸となるため、このカタマリは単なる**品詞類**とは違った性質を持っていると考えられる。

第3の方法は、**語**（名 形 動 副）や**語群**（名 形 動 副）に 助詞 や 接尾語 を組み合わせて**品詞変更**するものです。これによりできるカタマリは「**相当語句**」（名 形 動 副）です。

助詞による品詞変更

- 助詞 は 名 などに新たな意味を与える
- 特に 格助詞 は 名 などに**格**を付与して**係り要素**にする
- ただし、連体 副 陳述副詞 は特定種類の係り要素としてのみ使用される

※組み合わされるパーツの相互関係はさまざまだが、いずれも係り受けのような**明確な主従関係はない**と思われるため、ブロック表示においては**双方のパーツを右に半字分ずらして配置**する。

接尾語による品詞変更

- 接尾語 は相手の語に新たな意味を付加する（動詞を動詞にするものもある）

※同上。

0.8.5　日本語特有の構造あれこれ

以下では、それほど体系的とは言えませんが、動詞や形容詞などの「活用」を中心として、本書ならではの図解方法を工夫してみます。

形容詞の連用形

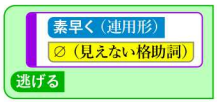
形容詞 が**連用形**になったからといって 副詞的修飾語 として働くとは限りません。たとえば「彼の反応は**素早く**、的確だ。」の構造は

形容詞「素早い」の単なる連用形

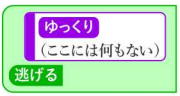


であって、この「素早く」はあくまでも 形容詞述語 （連用形中止法）です。そこで、「**素早く**逃げる」のように 形容詞 の**連用形** を 副詞的修飾語 として使うときには発信者の頭の中でそのことが認識されている（が表現されていない）と考え、**見えない格助詞** ∅ を記しておきます。

副詞的修飾語として使われる場合



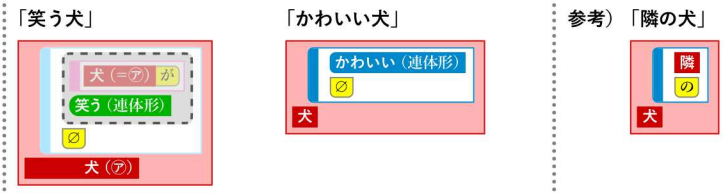
参考）純然たる副詞「ゆっくり」の場合



ポイントは、名詞 形容詞 などを 主語 目的語 などと区別するのと同様に、形容詞 副詞 を 形容詞的修飾語 副詞的修飾語 **と区別する**ことです。これは、ネットなどでときどき見かける「形容詞の連用形は形容詞なのか副詞なのか」という問いに対する本書での回答です。

動詞や形容詞の連体形

たとえば「笑う犬」「かわいい犬」の場合、

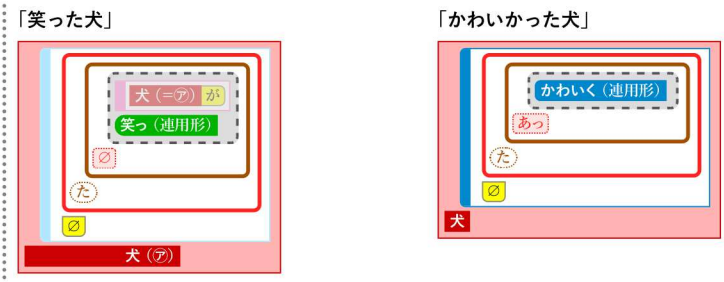


のように考えられるでしょう。

※「笑う犬」の方は**関係節**（**背景事情**は「犬が笑う」）を含んでいます。

※「かわいい犬」についても「犬がかわいい」という背景事情を考えることができますが、ここでは割愛します。

これで問題はなさそうですが、「笑った犬」「かわいかった犬」の場合はどうなるでしょうか。⑭**(4)**と同じ要領でそれぞれ図にしてみると



のようになるでしょう。だとすると、「笑う犬」「かわいい犬」についても



のようにした方が、表し方が一貫すると言えそうです。

※もちろん、特に必要がない場合には冒頭の記法で十分でしょう。

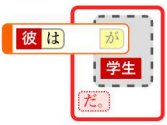
いわゆる形容動詞

学校文法では「元気だ」「好きだ」「嫌いだ」のようなものは「**形容動詞**」と呼ばれますが、本書では**活用しない形容詞**（元気 好き 嫌い など）に**断定の助動詞** だ が付いたものと考えます。それゆえこの章の最初で省略した「彼は元気だ。」は

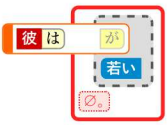
「彼は元気だ。」



参考）名詞文



形容詞文



となり、形容詞文より名詞文に近い（述語の品詞が違うだけの）構造だとわかります。

活用しない形容詞（いわゆる形容動詞）の連体形

意外に難しいのは、名詞を修飾するときに使う「元気**な**」の形です。この「な」は文語では「なる」（「なり」の連体形）でしたが、さらに古くは**助詞** に に**助動詞** ある （「あり」の連体形）が付いたものでした。それが現在は「な」１字になっているため扱いにくいのですが、とりあえず今は「赤い屋根」と同様の構造だと考えて、

「元気な学生」



参考）「明るい学生」



のようにしておきます。

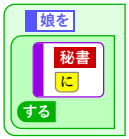
※な は**助動詞** だ の**連体形**とされていますが、これは 活用しない形容詞 に対してのみ使われ、名詞 に対しては使われません。この違いは品詞の違いが原因だと考えられます。

名詞 +「に」+「する」「なる」

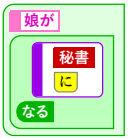
ここからの３つは、現在とは違う状態への変化を表す言い方です。

まず、変化後の状態を 秘書 のような**名詞**で表す場合は、その直後に**格助詞** に を置いてから**動詞** する、なる を付けます。

「娘を秘書にする」



「娘が秘書になる」



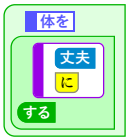
参考）「娘が秘書だ。」



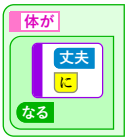
活用しない形容詞 +「に」+「する」「なる」

次に、変化後の状態を 丈夫 のような**活用しない形容詞**（いわゆる形容動詞の語幹）で表す場合も、 名詞 の場合と同様に**格助詞** に を置いてから**動詞** する、なる を付けます。

「体を丈夫にする」



「体が丈夫になる」



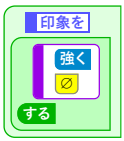
参考）「体が丈夫だ。」



通常の形容詞 +「する」「なる」

変化後の状態を 強い のような**通常の形容詞**で表す場合、その形容詞を**連用形**にしてから**動詞** する、なる を付けます。しかし、上記２者との整合性を考慮して、形容詞の直後に**見えない格助詞** ∅ を記すことにしましょう。

「印象を強くする」



「印象が強くなる」



参考）「印象が強い。」



比較対象として、「強める」「強まる」を使った単純な動詞文を掲げておきます。

「印象を強める」

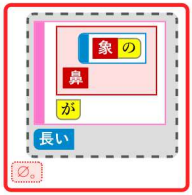


「印象が強まる」

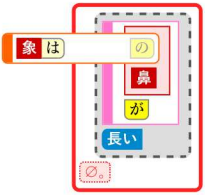


主題や対比などの扱い

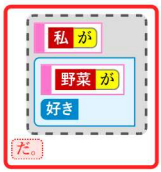
背景事情



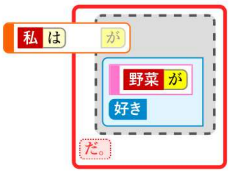
主語内の修飾語を主題にした文



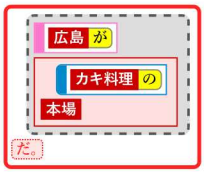
背景事情



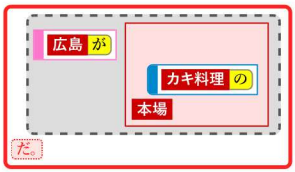
外側の主語を主題にした文



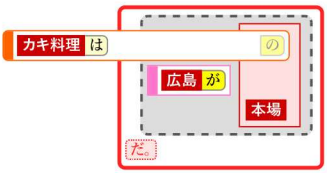
背景事情



準備として大きな字下げで配置変更



述語に対する修飾語を主題にした文



※「**背景事情**」の図はこれまでにも何度か登場しました。表したい内容の核になるものは（**事象部**）に含まれていますが、**語句間の意味的な関係**としては**判断**も含めて考える必要がありますので、情報が漏れないよう、あえて**文**のかたちで示してあります。しかしそれはあくまでも説明のためであって、実際の発話において**背景事情**を**文**のかたちでイメージする必要があるという意味では**ありません**。

0.9 「序」のおわりに

和文を素材とした解説はここまでです。「序」の内容がだいたい把握できたら、英文構造の学習に進んでください。

私には以前から「**現状の体系では国文法と英文法とを連携させることは困難ではないか**」という疑問がありました。とは言うものの、文法的な概念について理解するには、既知の言語（日本語）を素材として活用した方が合理的であることも事実でしょう。

そこで私はまず、**和文構造の新たな解析方法**を考えてみました。一例として「彼が渋谷に行った。」という和文であれば、彼が 渋谷に 行く が**事象**を表し、その事象が 過去の話 だということを た で示すのだ、というのがこの「序」で解説したことです（この点は三浦つとむに多くを負っています）。このような考え方は学校では教わりませんが、ここまでの解説で十分に理解できたものと思います。

もう一つの課題が**英文構造の新たな解析方法**です。たとえば He went to Shibuya. という英文を解析したい場合、日本語の 行く と た に相当する部分はどう考えればよいのでしょうか。あるいは、和文の 渋谷に は 行く を修飾していますが、英文の to Shibuya は何を修飾しているのでしょうか。これらについても英文構造図を駆使することで明確になります。また、国文法と英文法とを統一的に理解することも可能になります。

もちろん、新しい解析方法を採用したこともあって、私の主張には学校文法や学界の多数説などとは異なったものもいくつか含まれています。そもそも**人間の認識という目に見えない対象**を扱うのは容易なことではありませんし、自然言語においては**言語規範自体が不合理な部分を完全には排除できない**こともあって**隙のない文法体系の構築はそもそも不可能**です。それでも、せめて**国文法と英文法との理論的不整合くらいはできるだけ早く軽減すべきだった**はずなのですが、なぜかこの問題は何十年にもわたって放置されつづけてきました。そのような思いもあって、無謀にも私のような門外漢がこの面倒なテーマに取り組むことを決意したのでした。

四苦八苦したおかげで何とかできあがった新しい体系ですが、まだまだ勘違いや見落としが残っていると思います。しかし、それでもこれは**世に問うに値する形式と内容**を持ったものであると自負していますし、**日本の言語教育にも少しは役立つ**はずです。また、もし可能であれば、志を持った専門家たちによって**ヨリよい体系や方法が提案されるキッカケ**に本書がなれば、とも思っています。

最後に、すぐれた独学者でもあった先達（せんだつ）・三浦つとむの言葉を紹介しましょう。

> **学ぶとは、目的をもった人間の活動である。ほんとうの独学とは、自ら進んで対象ととりくむことである。独とは、独自・独力の意味である。それゆえ、たとえ学校で教師についていようと、教師の言葉や教科書の文章を暗記するのでなく、懐疑精神をもち、独自の見解・独自の理論を立てて研究活動をしている学生なら、それは正しい意味の独学者である。**
>
> ※三浦つとむ『弁証法・いかに学ぶべきか』（双流社、1950年）p.45（強調は引用者）

言語に関する研究では何の肩書も持たない私ですが、せめてこの「**正しい意味の独学者**」でありたいと考えています。